狂言

昭和48年1月1日発行
発行所
名古屋市中区長門町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。

本紙「狂言」もまた一つ年を取りました。昭和三十一年の創刊より十七年本年三月にはどうやら通巻一五〇号を数えることが出来そうです。さゝやかなパンフレットではございますが、ご愛好の皆様の暖かいご支援に支えられてこゝまで続けて来ております。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

＊本年は丑年です。これにちなんで三宅藤九郎先生より次の狂言小舞謡をお送りいただきました。御紹介します。

丑年　小舞謡

牛

めでたきものは牛に候。
額のまき毛うず高く。
宝の珠をあらわすは。
富貴萬福有りという。
牛王の誓いなるらん。
〈。

（藤九郎　作）

＊本年も数多くの狂言会が予定されておりますが、昨秋発足しました「名古屋狂言小劇場」が早くもこの二月三日（土）に第四回を開催します。今回は「抵抗の精神・その1」と題し、別掲（二月の予告）の通りです。多数ご来場下さい。

＊昭和四十八年度に当地で予定される狂言会の日程は次の通りです。

二月　三日（土）名古屋狂言小劇場(四)
三月十八日（日）大蔵流狂言名古屋会
六月初旬頃　名古屋狂言小劇場(五)
七月　八日（日）朝日狂言会
八月下旬頃　名古屋狂言小劇場(六)
十月　十日（祭）名古屋和泉会
十一月十一日（日）やるまい会

（名古屋狂言小劇場のみ名演会館、他はいずれも熱田神宮能楽殿にて開催）

＊〈訂正とお詫び〉

前号（第百四十七号）にて十一月二十三日観衛会における「世阿望憶」の上演を当地初演と記しましたが、昭和三十八年三月三十一日「中日五流能」に於て上演記録がありますので、訂正とともにお詫び申し上げます。

謹賀新年

昭和四十八年元旦

狂言共同社

一月の催能

一月　六日　学生能と狂言の会

能　経政　小津吉義　成頼喜代士
能　蝉丸　鹿野秀司　市川邦之　高安滋郎
間　井上松次郎

狂　萩大名　河村洋和　牧村昭司　水谷宗広

一月十五日　清韻会

一部
能　田村　中村克己　西村欽也
間　佐藤秀雄

二部
能　弱法師　大槻秀夫　高安滋郎
間　井上松次郎

狂　長光　野村又三郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

一月廿一日　宝生定式能

能　熊野　倉本雅　西村欽也
能　国栖　野口緑久　西村欽也
間　井上礼之助　佐藤友彦

狂　末広　井上松次郎　佐藤秀雄　大野弘之

一月廿八日　三人の会

能　通小町　和島富太郎　西村欽也
能　国栖　泉嘉夫　高安滋郎
間　井上礼之助　佐藤友彦

狂　止動方角　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎　井上礼之助

狂言解説

萩大名＝永々在京中の大名、訴訟に勝って晴れて帰郷することになり、今日は清水へのお礼参りをかねて太郎冠者の名染みの茶屋の庭を見物することにしました。庭先の萩の花によそえて詠む歌の一首を、太郎冠者にあらかじめおそわっておくのですが……。

長光＝都へ上る途中の田舎者、その身に不似合な立派な太刀を持参しています。途中近江口松本の市を見物する所へ、いきなり田舎者の大事な太刀に手をかけ、我が物だとよばわる者が居ます。両者が争う所へ目代が登場し、太刀の所有について両者の云分を聞くのですが……。長光（ながみつ）とは太刀の銘のことです。

末広＝大果報者、正月の進上用の末広がりを買求めるため太郎冠者を上京させました。はる〈都へ上った冠者が高い代金で求めて来たのは、何と古傘が一本。スッパに抜かれた冠者にすっかり立腹した主は奥に引込んでしまいます。と、そこに愉快な囃子物が聞えて来ました。

おめでたい脇狂言の代表曲です。

止動方角＝茶競べに出席する道具をすべて借り物ですまそうという主、伯父のもとから太郎冠者がやっとのことで容器に入れた茶、太刀、馬まで借りて戻る所を、主は遅いと頭ごなしに怒鳴りつけます。その後も続く悪口雑言に遂にこらえかねた冠者は、僻のある馬を幸い、主へ意趣晴しを始めます。

止動方角とは馬を鎮める呪文です。

狂言大小

野村広二

新年おめでとうございます。四十八年の能界ができるだけ明るい年でありますよう、まずみなさまとともに祈りましょう。

四十七年も記録に残すべき事の多い年でした。それらのうち、三、四について年の始めに長短のことばで顧みたいとおもいます。昨年も十二月に入って、芸術祭大賞の豊嶋弥左ヱ門氏決定と同時に、同優秀賞が狂言の大蔵弥太郎・善竹圭五郎、野村万作氏にきまったことをまず喜びたい。茂山千作翁が喜寿の祝いに「釣狐」を勤めて、ゆるがぬ健在振りを、三宅藤九郎氏が新作・夢枕にかわらぬ才気を示しました。野村万蔵氏は「空腕」（名古屋・朝日狂言会）を演じて透徹した活達な芸をみせました。三長老が今年も元気で舞台に出勤されますように。次は、大蔵弥太郎氏が「月見座頭」（名古屋和泉会）「千切木」（テレビ、NHK、以下おなじ）のまじめで重厚なわざで、しみじみとまた淡白にあたたかい情感とおかしみをみる者の心に与えてくれました。これを特筆したい。「釣狐」も「花子」も上演されて喝采をうけ、関西の狂言小劇場公演（茂山千五郎）の熱意や東京・狂言新の会の発足に寄せられた好意ある希望のことも記録に残しておかねばなりません。また、テレビで狂言が八回（三番叟・末広がり・弥宜山伏・千切木・井杭・武悪・釣狐）前後も放送され、なかに釣狐（万作・万之丞）がとりあげられていることを忘れてはなるまい。四十四年・関寺小町」（ラジオ、梅若六郎）四十五年・卒都婆小町（テレビ。桜間道雄）四十六年は桧垣（ラジオ、道雄）とこれ大きな話題といえましょう。テレビ能の方は十回ほど。新観世能楽堂落成祝賀の「翁」（元正）「高砂」（元昭）をはじめ「屋島」（大西信久）「玄象」（万三郎）「藤戸」（高橋進）「恋重荷」（道雄）「黒塚」（金剛巌）「三井寺」（喜多実）など多彩でした。今年も元旦からテレビ能や狂言はラジオとともに楽しめることでしょう。能楽関係資料の収集は武蔵野女子大に資料センターがつくられ、その活躍が期待されますが、法政大能楽研究所と東京国立文化財研究所がめでたく設立二十周年を迎え、その記念講演会を開きました。法政大の方は故野上豊一郎博士のお名前を忘れてはならない。わが思師谷川徹三先生の講演があり、「能の美しさ」について話をされた由。これを拝聴する機会を逸して、まことに残念でなりません。それと国立小劇場の催し・声明をきけなかったことも。他方、狂言や能の周辺との触れ合いは昨年も活発でした。「オイディプース王」についで「アガメムノーン」の上演（冥の会）はその一例です。心を明るくする祝い事にひきかえ、昨年も梅若猶義氏をはじめ二・三の方を失いましたことは惜しい。東西における進歩的かつ伝統保持の活躍に添えて故猶義氏の名古屋演能は、「仲光」「清経」「班女」「芦苅」「善知鳥」に「卒都婆小町」など、四十四年二月には二番能を「実盛」と「花筐」で舞われた。せん細・絢らん。鮮明と同時に陰影のある持ち味でした。一種のあわい甘さもあったようです。これからの老女物を期待していましたのに、それを前に他界され、名古屋の演能も明るさを減じました。もうあの格調高くはなやかな能はみられません。名古屋では江戸文学者で能楽愛好者の尾崎久弥氏、平曲の研究に洋楽にもくわしかった藤井制心氏が鬼籍に入られる。あらためてご冥福をお祈りしたい。

さて、能楽関係の図書出版は昨年も盛んでした。年末だけでも、「対談・能と狂言の世界」（横道万里雄編、平凡社、名古屋関係は高安滋郎と檀風、初代井上菊次郎・故永田虎之助・塚本秀雄ご尊父のことなど）「狂言六儀の研究」（松本亀松、わんや書店、狂言三流、主として大蔵・和泉二流を対象）「日本人と日本文化」（対談、D・キーン・司馬遼太郎、中公新書、サンソム卿と舟弁慶の翻訳）「能の話」（D・キーン・小西甚一・司会芳賀徹歴史と人物四八、一、中央公論社、狂言の文学性ほか）「夢と神話的世界の構造」（西郷信綱・山口昌男、夢幻能と夢ほか、引例・戸井田道三著能・神と乞食の芸術、伝統と現代四八・一、夢特集）「能写真集」（吉越立雄、筑摩書房）「能謡新考」（香西精、桧書店、未見）などがあげられる。吉越氏の写真集は豪華本、たとえば清経（巌）一枚をとっても、切りのあたりを胸ふところ深くうつした実にすばらしい作

賀正

ふぐや
河文
電話代表(231)一三八一番

トヨダビル店
大名古屋ビル店

くすな
船津屋
電話桑名代表㉒八一八〇番

品でした。余いん嫋々（じようじよう）とはこのことでしょう。丸善でみて三・四日たってもう一度立ち寄れば、それはすでに誰か愛好者の手に帰したらしく、その美しい姿はなかった。この頃能関係の本の入手も高価な和服や、器並みで、みつけてその場で求めないと、手にし損ねることがたびたびあります。また年がたつと、庫入りの本も整理されてありません。用あって「狂言百番」（北川忠彦・葛西宗誠、淡交新社、三八年）を注文しましたがなしとのこと。古本もみつからず、ないとなると何かと探し出したいと苦労します。

昨年の名古屋はどうだったでしょうか。能界が全体としてまた各地で各流儀が恒例の行事と、その年の特別の催しや新企画を添えて東奔西走、美しさと笑いの高い境地を目指しながら忙しい月々を追っていくのは申すまでもありません。勢つよく流れること、淀んで停滞すること、深くもあり浅くもあり、巾広くもあり、狭くもあり、またしづかに進むことも溢れることもあるはづ。ある年高い位置の運動が次の年には低くはうこともあるでしよう。要は永い目で鋭く広い展望でみていくことでしよう。しかも辛抱づよくこらえて。偏見や邪見、付け焼刃は避けたいものです。「なぜ大事件は続発するか・それは室町文化の崩壊を意味する」百目鬼恭三郎、文芸春秋四八・一）「音楽展望・第九詣で」（吉田秀和、朝日四七・一二・一四夕刊、文化欄）をよみおえて、にわかにあわい不安が雲霧のようにひととき拡がりました。しかし、現代の文化・芸術にたち向う狂言や能は弱いもので実は強いものを持っているとおもいます。もう一度これを考えてみるのも一公案といえるでしよう。わたくしも「芸術の運命」（谷川徹三）を開いてみることにしました。名古屋の一年は実にしづかに落ちついた進み方でした。これでよかったとおもいます。じっくり腰を据えて慎重な一年であったことが新年の新出発飛躍を予知させる気配さえ感じさせます。わたくしの周辺でも、秋に一夜、日本文化国際研究会議に出席のためはるばる西独から来日のH・ハミッチュ博士と秘書の哲学博士B・ブルュル女史のお二人とM医師の紹介で懇談の機を得た。かって八高（旧制）のドイツ語教師であり、西独の日本学泰斗であるH博士はM医師のご尊父からの二代のつきあい。きれいな白髪の、まつ毛の長い、葉巻を手からはなしたことのないH博士は日本の自然と昔の名古屋を大変なつかしがって、新旧の懐旧談と現代文化都市名古屋にちらり鋭い批判をのぞかせる話に花が咲く。今昔物語や新古今の訳者であるH博士は世阿弥の芸術論の翻訳に着手したい抱負を視野広く語られた。しとやかなB女史から「能のカタはいつできた（定着した）のですか」とむつかしい質問がでた。これを解くのは能楽の全歴史を語ることになるでしよう、徳川時代式楽になる前後は一眼目です、室町時代はいまとちがうあざとい芸（カタ）がおこなわれていたようです、舞と踊りのちがいも参考になりましようなど苦しい話をした。日本芸術の特色、象徴主義と無心の境地（日本の芸術の一視点谷川徹三）をかいつまんで語ったが、神楽や舞楽にはふれなかった。能の本質、構成要素を解く大切な問題にへき易しました。能に対する内外の距離感は、せばめられています。「能・捨心の芸術」（能の型、桜馬道雄）を紹介し、橋岡久馬氏が舞った「遊行柳」の能組（フランス語・久馬氏談）など持ちかえってもらった。長い滞在中、狂言や能と日常生活、放送にもふれられるようすすめたが、これは狂言の会、（第三回名古屋狂言小劇場、狂言四番）をみてもらうだけがやっとであった。見物感想は大変よかった。眼目の会議のおこなわれる京都では第一日の夜は金剛能楽堂の畳敷の見所で「井筒」、（巌）を、二日目は南禅寺脇の野村氏別邸のすばらしい庭のうちで「猩々」をみて、どんな感慨にひたられたか、ききたいとおもって果せなかった。帰途の旅情をなぐさめるため、「源氏物語」（保育社カラーブックス）の一書を呈した。きれいな日本語の字で宛名を書いた別れの封書をいただいた。

狂言の方では、東西の狂言師の来名は申すまでもありません。朝日狂言会、名古屋和泉会、やるまい会は例年のとおりおこなわれ、狂言芸のよさをたん能させました。「宗論」（千作・千五郎）「縄ない」（千五郎）「月見座頭」（大蔵弥太郎・忠一郎）「空腕」「かくし狸」（万蔵・万之丞）「茶壺」（万作・万之丞）「千切木」（万之丞・万作）など、どれも秀逸でした。保之演ずる「三番叟」「末広」「合柿」は好演。朝日狂言会は今年十五回目の公演を迎えます。多彩な番組を今から期待したい。三番叟は卯三郎、又三郎両氏も勤める。共同社は毎年と変らず五十番前後の狂言を演じ、名古屋のよき味をみせてくれました。名古屋狂言小劇場（大声会・佐藤友彦）の発足もしるしておきたい、上演狂言はどれも佳篇。三回を重ね、少数であるが満席の観客席はいたってなごやか。名古屋も「釣狐」（又三郎）が舞われた。これはルオーの人物画をみるような心的葛藤のつよい演じ方であった。「金岡」（松次郎）も力演であった。第二回大蔵狂言会（なごや会）も盛会におこなわれる。能は、元正、六郎（頼政・井筒・葵上）、山本博之（雲林院・卒都婆小町、世阿望憶）三氏が三回の来名です。「頼政」（六郎）「半蔀」（鉄之丞）「葵上」（野村蘭作）には永年稽古をつんだ人にだけみられるふっくらとした味わい深い芸の重味を汲みとることができました。

名古屋の能では、「翁」（殿島修二）「松風」「俊寛」（梅田邦久）「清経」「望月」（内藤泰二）「羽衣」「黒塚」（長田曉）ほかが舞台を飾った。大衆能・薪能・義援募集能が催され、学生能も、婦人能も盛んでした。

年末の放送は「狂言について」（井上松次郎、野村又三郎、二回）「定家」（元昭）「鉢木」（英雄、佳篇）をきく。

終りに、今年の名古屋の能界の方々には清新さと能楽周辺の諸芸能への理解と結び付きへの関心を深められるようお願いします。あわせて調友会の催しを続行していただきたいことも、きびしく、広い目で、やさしく、根気をもって。

丑の年

西村弘敬

干支によれば、今年昭和四十八年は丑の年に当る、此丑といふ文字を、世間一般では牛といふ字に当て、動物の牛として用ひて居る、能や狂言の方では、此牛其物を主体として作られて居る曲はない様に思ふ、狂言には牛盗人（うしぬすびと）といふ至極上品で、然も人情味豊かな曲があるが、謡の方には之に匹敵する様な曲はない、色々の謡の中に牛といふ字の出て来るものも幾分はある、先づ百万の曲には「牛の車のとことわに」とか、葵上の曲には「浮世は牛の小車の」、又熊野では「牛飼車よせよとて」など、まだ外にも少々あるかも知れぬが、一番重く牛を用いてあるのが車僧の曲である、此禅問答が中々に興味深いもので、茲に少々ばかり引用してお目にかける。

シテ「などかは引かであるべきと、答を振り上げ車を打つ」ワキ「おう車を打たば行くべきか。牛を打たば行くべしや」シテ「実々車は心なし、扨牛を打たんもあらばこそ」ワキ「愚や汝人牛の道、見へたる牛をばなど打たぬ」シテ「見へたる牛とは扨いかにそも人牛は」ワキ「打つとも行かじ」シテ「扨お僧の打たば行くべきか」ワキ「中々の事いでさらば、露地の白牛を打って見せんと、拂子をあげて虚空を打てば」ふしぎやな此車の、と車が動き出した様に作られてある、此曲は常識的には考えられぬ事ながら、此禅僧の法力を過大に表はしたものと思へる。之も丑の年の一曲か。

二月の予告

二月三日　大声会　於名演会館
二人大名　佐藤友彦　鷲見政行　大野弘之
寝音曲　野村又三郎　井上礼之助
縄ない　井上松次郎　佐藤秀雄　佐藤卯三郎

二月十一日　観世会　午后一時始
能　絵馬　観世喜之　西村欽也
間　佐藤友彦
翌　花筐　観世元正　高安滋郎
狂　貰聟　野村又三郎　井上松次郎　佐藤秀雄

二月十八日　梅猶会
能　小督　菊地重郷
間　佐藤秀雄
能　安達原　梅若盛義
間　井上松次郎
狂　節分　井上礼之助　佐藤秀雄

二月廿五日　青陽会
能　兼平　柴田牧武　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　羽衣　服部紗枝　高安勝久
能　葵上　大槻文蔵　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　餅酒　佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎

能楽協会名古屋支部よりおしらせ

旧冬十二月催しました歳末助け合い義捐能は純益を左記の通りそれぞれ、県、市へ寄託致しました。
各位の絶大なる御協力を感謝致します。

愛知県　拾六萬四千五百五円
名古屋市　拾六萬四千五百五円

謹賀新年

一謡会　河村鉦二
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
潤水会　林甲子夫
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
高安会　高安滋郎
鼓雲会　内藤泰二
調友会

風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
春鶯会　山田仁三郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
青陽会
名古屋支部（能楽協会）
和泉会（名古屋）
共同社（狂言）（イロハ順）

狂言

昭和48年2月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481) 7445

狂言人語

＊暖かい冬の日が続いております。吹く風は身を切る様に冷たいのですが、午後の陽だまりに身をおけば、眠くなるほどの暖かさです。二月に入ればすぐ立春、そしてお水取りと、春が近ずいています。いましばし、寒さの中、お身体に充分お気をつけ下さい。

＊さて二月の能会は今年度の各会の初回が続きます。元気に一周年を迎えた「名古屋狂言小劇場」も数えて第四回です。御期待下さい。

故田鍋惣一郎氏法要の事

田鍋惣一郎氏の法要が氏の誕生日一月十七日、中区大須阿弥陀寺に於て、夢見の悪かった一女性の発願で、藤田六郎兵衛、井上松次郎、願主となり楽師有志により厳修された。

これは氏の死後しばしば、かの女性の枕頭に立ち、或は訴ふるが如く、或は思出話をして独特の笑声を発する等魂は冥土にあり乍ら魄は此世にとゞまって尚此世に未練ありげな様子。

又一方名古屋市民会館の柿落（こけらおとし）が能と内定した四十六年八月頃より御出勤諸先生への交渉、又市側との折衝等、時すでに食道癌のきざしがあり、幾分衰弱された身体を押しての骨折、爾来氏の余命はこの柿落にかけられたと申しても過言ではありません。

然るに悲しいかな四十七年四月会館の完成も見ず黄泉の客となられた。

氏の心中さこそと思いやられ、楽師も加はっての法要と相成りました次第です。

惣一郎氏よ以て冥せられよ。

頓生菩提

二月の催能

二月　三日　大西会　於名演会館

二人大名　佐藤友彦　鷺見政行
寝音曲　野村又三郎　井上礼之助
縄ない　井上松次郎　佐藤秀雄　佐藤卯三郎

二月十一日　観世会　午后一時始

能　絵馬　観世喜之　西村欽也
間　佐藤友彦
狂　花筐　観世元正　高安滋郎
狂　貫鞍　野村又三郎　井上松次郎　佐藤秀雄

二月十八日　菊地重郷準師範披露会

一部
能　羽衣　杉田合子　西村欽也
二部
能　小督　菊地重郷　西村欽也
間　佐藤友彦
能　安達原　梅若盛義　高安滋郎
狂　節分　井上松次郎　井上礼之助
二月廿五日　青陽会
能　兼平　柴田牧武　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　羽衣　服部紗枝　高安勝久
能　熒上　大槻文蔵　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　餅酒　佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎

狂言巻空

野村広二

年末と小正月頃わが家では「土間暗く雪沓そろへぬいであり」の短冊を二度飾る。紅に数条の金の小さな横雲の短冊。俳人孵子（ふし）・原田基二君の作である。この描写が奥三河の花まつりにまた正月の風景に相通うからである。友人孵子は奥三河で育つ。彼が語った幼時の話は、滝平二郎のきりえの世界で、その美しさは今でも消えない。あえぼかならず長短の俳話が口にでる。あいさつをすると、「あ、あごひげが随分のびたね」と、晋通の人なら「今日は」とか「よお」とか笑顔に添えてかえってくることばの代わりにそれである。俳句を作る人の鋭い観察力のせいであろうか。その観察・理解・描写と孵子の心に流れる一連のはたらきのうちに一句ができるのであろう。俳句の世界と狂言や能の世界とはもちろん相重なる分野と独自の領域をもっていよう。そしてまづ説明でなしに、描写・表現することが大切であろう。やがて、一番の能（狂言）がうまく舞えたとき、われらの教師たちは次のように語る。「鍛えた芸はいうにいわれぬところに味があります」「やや気のすむまで演じた後はそのよろこびも深いものがあります」（先代金太郎）「無心でやって、そこに現われるものが、（羽衣ならば）天女になっていなければなりません。　稽古をつくして稽古を忘れ、無心になることが大切でしょう」（兼資）「偶然に、自然にほとんど予期しないで、その時の条件が都合よくそろうという場合がある。そのときが成功なので、結局は観者にもおもしろい能になる云々」（六平太、三つとも、文芸春秋社・人生の本第六巻・芸術編ノートより）。

正月三か日は今年も邦楽放送をみたりきいたりしてすごす。三日のラジオ「若菜」（万蔵）が秀逸。二日はいつものように三・四冊の本を開く。「万法帰一」「世阿弥と禅」（香西精）「エピクロス」「狂言記」（湯川秀樹）「東洋画の世界」（谷川徹三）。万法帰一には「信心銘」（僧璨）の「心若不異。萬法一如。一如微去。兀尓忘縁」に考えがつながっていく。狂言は「長光」「（又・礼・卯）「末広」松・秀・弘）をみる。共同社は今年も晴れやかな出発。催しは「能装束展」（徳川美術館）に行く。冬の晴れた日のしづかな風景が心にしみる。雪持松、柳にけまりの唐織や唐人相撲の装束三つが美しい。十本に余るかづら帯も釣狐の二面も展示される。

放送は「朝長」（鎖之亟）をきき、「木六駄」（万蔵）「釣狐」（万作）をみる。ほかに、「七二年の邦楽界」（横道万里雄ほか）「伊勢の狂言」（岩

本平八郎ほか）「田楽」（本田安次・三隅治雄ほか）「古典と現代・風姿花伝・劇的人生論」（湯川秀樹・山崎正和・金剛巌）があった。本は「能楽研究の近況」（小西甚一、朝日、四七・一二・二六）「春はすむ・茂山あきら、ほか」（朝日、一・一三）。

追記。一月号、」・ブリュル女史がBブルュル女史となっていました。お詫びして訂正します。

二人大名

狂言「二人大名」の楽しさは、何と云っても例の起上り小法師にあると云えるだろう。身ぐるみ脱がされた二人の大名が、通行人に太刀で脅されながら、ころ〳〵と転がり廻るわけである

京に〳〵はやる起上り小法師、ヤヨ殿だに見れば、殿だに見れば、つい転ぶ、つい転ぶ。

合点か合点じゃ、合点、合点、合点じゃ。

現行の大蔵、和泉両流の諸台本とも、この歌謡に大差はないが、江戸時代の刊本「狂言記」では多少異同が見られ次の様に謡われる。

京に〳〵はやるおきあがりこぼし、好い殿見れば、殿さへ見れば、ヤヨ、ハ、合点か、がてんか、つひころぶ。

ところで、この起上り小法師に至るまでの、通行人と二人の大名とのやりとり（通行人が太刀を振り上げた後）には、大蔵、和泉両流とも諸台本にかなりの異同が見られ、このやりとりの順番を示すと次表の如くになる。

儀流	大蔵流			和泉流				三百番集	狂言記
台本	虎明本	虎寛本	山本東本	天理本	波形本	型付本	雲形本（別）		
をうのい 刀 小袖	1	1	1	1	1	1	1	1	※2
合上下ぐのいり師 鶏蹴 小袖 脱	4	2	2	3	4	3	3	4	1
	2	3	3	2	2	2	2	2	2
	5	4	4	5	3	×	5	3	×
起上法師 小犬	3	5	5	3	5	4	4	5	3
似真の馬	6	×	×	×	×	×	×	×	×

（※狂言記では小刀の記述がないので小袖上下と一諸に取ったと思われる）

こうしてみてみると、大蔵流では「虎寛本」以降ほゞ固定したと考えられるが、和泉流では「三百番集」を別扱いとして見れば、かなり流動的な感じに受けとれる。結局両流の大きな相違点は、鶏の蹴合いをするに小袖上下を脱いでから演ずるか、脱ぐ前に演ずるかと云う点にある。小袖上下着用のまま蹴合う大蔵流では「鶏聟」の場合と全く同じ華やかで大きな型を見せ、小袖上下身ぐるみ剝がれて蹴合う和泉流では扇も用いず、両の袖を巻込んで羽ばたく独得の型を見せる。

起上り小法師は演出上からは最後になるのがふさわしいようであるが、和泉流では、犬の噛合いが最後となるのが本来の姿の様である。しかしながら「雲形本」（別冊）では、これを「白犬の伝」とし「古書の趣也」「なしにてもする也」と後注に記しており、「波形本」ではすでに省略されている。名古屋ではこの犬の真似は現在殆ど行わず大名の裝束もこのため朱の無地もので行っている。

馬の真似（蹴合いであろう）だけは「虎明本」以降、さすがにいずれの諸本も伝えなかったようである。

（鈍太郎）

三月の予告

三月　四日　九皐会
能　羽衣　野垣慶子　高安滋郎
半能　高砂　観世喜之　西村欽也
狂言　三人長者　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

三月十一日　洗心会
能　舟弁慶　奥村富久子　南条秀雄　高安滋郎
間　野村又三郎

三月十八日　大蔵流　狂言会

三月廿一日　謡楽会
能　能坂　武田小兵衛
間　井上松次郎

三月廿五日　中日五流能

一部　午前十時始
能　頼政　金春信高　金春栄次郎　高安滋郎
間　井上松次郎
能　松風　観世元正　森茂好
間　山本東次郎
能　殺生石　江崎金次郎
間　友枝喜久夫　野村又三郎
狂言　二人大名　山本則俊　山本則直

二部　午後四時始
能　羅生門　金剛巌　高安滋郎
間　茂山千五郎
能　采女　観世喜之　江崎金次郎
間　茂山千之丞
能　葵上　野口緑久　森茂好
間　佐藤卯三郎
狂言　磁石　茂山千之丞　茂山正義
茂山千五郎

酒味噌商
たまり
食料品
むとう食品店
名古屋市昭和区川名本町1の10
電話（762）2166番

昭和48年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

水ぬるむ三月、寒さも薄紙を剝ぐ様に次第〳〵にやわらぎつゝあり、気の早いつくしの頭が、日当りの良い河原の斜面に見つけられる此頃です。

本紙「狂言」も、本号でどうやら百五〇号を数えました。昭和三十一年十一月二十五日、創刊号を発行してより早や十七年目を迎えております。その発刊の労を執り、自ら編集、原稿執筆に当った故歌村彦四郎氏の亡き跡、編集も代を替え、紆余曲折しながらもこゝまでやって参りました。さゝやかなパンフレットではございますが、ひとえに皆様の暖かい御支援によるものと厚く感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

役員改選

二月十五日　能楽協会名古屋支部の総会が開催され次期役員、左記の通り決定。

支部長　藤田六郎兵衛
副支部長　高安　滋郎　柴田初太郎
常議員　林　甲子夫　梅田　邦久
久田　秀雄　尾関健太郎
殿島　修二　内藤　泰二
竹腰　勝一　大塚　一二
林　鉄郎　長田　驍
筧　三男　福井啓次郎

監事　後藤孝一郎　河村総一郎
筧　鉱一　鬼頭喜太郎
助川　竜夫　井上松次郎
佐藤卯三郎　井上礼之助
鬼頭　八郎
相談役　西村　弘敬

三月の催能

三月　四日　九皐会
能　羽衣　野垣　慶子　高安　滋郎
半能　高砂　観世　喜之　西村　欽也
狂　三人長者　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

三月十一日　洗心会
能　舟弁慶　奥村富久子　南条秀雄　高安　滋郎
間　野村又三郎

三月十八日　大蔵流　狂言会

三月廿一日　謡楽会
能　熊坂　武田　邦弘　高安　滋郎
間　井上松次郎

三月廿五日　中日五流能
一部　午前十時始
能　頼政　金春信高　金春栄次郎　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　松風　観世　元正　森　茂好
間　山本東次郎
能　殺生石　友枝喜久夫　江崎金次郎
間　野村又三郎
狂　二人大名　山本東次郎　山本則俊　山本則直
二部　午後四時始
能　羅生門　金剛　巌　高安　滋郎
間　茂山千五郎　観世　喜之　江崎金次郎
能　采女　茂山千之丞
間　野口緑久　森　茂好
能　葵上　佐藤卯三郎
間　茂山千之丞　茂山千五郎　茂山　正義
狂　磁石

狂言解説

三人長者＝参内して上頭より長者号を賜って帰郷する三人の長者が一堂に会しました。河内国せせなげ長者、大和国市森長者、近江国浦生の長者、三人の長者はそれ〴〵名乗りを上げ、舞納めとなります。

二人大名＝連れ立って都へ上る二人の大名、途中無理矢理通行人を太刀持に仕立てたことから主従は転倒し、二人の大名は太刀で脅されながら身ぐるみ剝かれ、鶏の蹴合、犬の嚙合、果ては起上り小法師の真似までさせられる破目となります。

磁石＝遠江国から都へ奉公に上らんとした若者、途中大津松本の市で人買にだまされ、危うく売りとばされんとした所を、逆に機転をきかし、鳥目をかすめとって逃げ出しました。さあ人買いは太刀を持ってこの若者を追ったのですが……。

狂言の人名

狂言では、劇中の登場人物が特に名前を与えられていないことが多い。従ってその名を呼ぶ必要がある時は、演者自身の本名を借りて「誰々殿」と呼ぶことになる。時にはそれが非常に現代的な響きを持つ名前であって、劇の流れに多少の違和感を与える場合がない訳でもない。

ところで名前が与えられて活躍する場合も少くない。

㈠下人が普通太郎冠者で呼ばれる様に最も狂言に登場する一般的な男として「太郎」の名で呼ばれるもの。「鎌腹」「吃り」「千切木」などの主人公、及び「川原太郎」「弓矢太郎」など。この他「梟山伏」の病人大蔵流では「縄綯」の主人の搏打の相手が太郎である。

㈡名前によって登場人物の性格、職業その他を表わすもの。

見物左衛門、武悪、悪太郎、鈍太郎万歳太郎（松拍子）など。

なお、この他特殊な職業、階層の人間として、座頭の菊一、伯陽。雅児の千みつ、比丘貞、若市などがある。

㈢太郎に次ぐ一般的な名前である三郎の名を特に与えられているもの。

左近三郎（猟師）、兵庫三郎（牛盗人）刑部三郎「鶏猫」の罪人、狂言記「さし縄」の搏打相手など）

この種の名前は時として劇中に登場しない第三者に対しても用いられる（枕物狂など）

㈣滑稽さをねらった戯作的人名。

柿木原渋四郎左衛門（深草祭）
梅木原酸右衛門（見物左衛門）
三条又九郎右衛門（未広・虎明本）

㈤実在の人物の名を借りたもの。

在原業平（業平餅）
金岡（巨勢金岡、奈良朝の画家）
鎮西八郎為朝（首引）
朝比奈三郎、義秀（朝比奈）

㈥舞狂言に登場するもの。

平六（塗師）、祐善（傘張）、楽阿弥（尺八吹）など。

㈦女性の名前

いちゃ、おがう、おなあ、花子

㈧その他

右近、左近（いずれも百姓）、塩飽藤三（右流左止）、藤六、下六（いずれも下人）

この他、江戸時代の刊本である「狂言記」には、劇中人物として「胸突」の両者に七兵衛、八兵衛、その他、源太夫、長兵衛、庄右衛門、九郎次郎、六郎兵衛などの名が見えるが、或いは仮作名であるか、今日と同様演者名を云ったのか不明である。

（鈍太郎）

狂言巻空

野村広二

「狂言」はこの三月で第百五十号を迎える。年九回の発行で第百号記念が昭和四十二年の九月であったのに、歳月のたつのは早い。それまでと同様、名古屋の能楽界と歩んで五年有余。一段と成長し、地味で謙虚な活躍を続けながら、その役割を果してきたことは美しい。月々の催能記録の欄一つを取り上げても、狂言と能の歴史を綴る大層貴重な資料といえましょう。たとえば、覚えているはづなのに、あゝあの年にこんな狂言が、こんな能があったと、うすれかけた印象をあらためてみずみずしく、あざやかによみがえさせてくれる。自分の観能メモ、各会でいただいたくわしい能組があるからそれで十分であるが、それとは別に、月を追い通覧していける便宜が与えられてきた。さて、この五年間の狂言共同社の動きを少しかえりみましょう。毎年五十・六十番の狂言に共同社の狂言師たちは楽しい舞台を展開する。丘造氏は四十年に小舞・大原木に風格をみせて舞ったあと病気養生中、卯三郎・松次郎・礼之助・秀雄・友彦・弘之ほかに又三郎（やるまい会）の諸氏。大勢物の狂言には狂言芸を教えこまれた顔触れを揃える。なつかしい。名古屋狂言の味、おだやかで・やわらかくて、地味で、白砂糖でできたあの淡い味の佳さに、いまではゆったりとして重く

（弘）他方やや鋭角的できりりとした

（友）味を加えて、いよいよ多彩である。二月の「餅酒」（友・弘・松）がこれをよく物語っていたが、この二人に明るくやさしい（祐一、在京中）が交われば、次の時代はまづ安泰。「覊猿」の猿の役には事欠かぬから、その次の時代にも希望を寄せてもよいであろう。たとえ狂言の道がけわしくともそのおかしみを求めて懸命でありますように。四二・三番叟（友）、四三・三番叟（弘）、覊猿二回、祐一上京、四四・宗論（松・礼・卯）、四五・那須、語（松）、花子（又）、四六・釣狐と腰祈（卯）、通円（又）、四七・金岡（松）、釣狐（又）、名古屋狂言小劇場発足、四八・兼平の間狂言（秀）は特筆すべき記録の一部。「宗論」は万蔵・千作両氏をはじめ毎年のように演ぜられて好演の印象が強い。今年で朝日狂言会は記念すべき十五回、名古屋和泉会は十三回、やるまい会は十四回を迎える。どれも毎回愛好者の期待にこたえてきたのはいうまでもない。また共同社は、四十二年故善竹弥五郎追善会に「大般若」（京都）、四十四年玄恵法印記念狂言会に「蚊相撲」（大阪）をつゞめて認められたこともあわせて書き添えたい。放送・狂言の本・名古屋の能界・東西の狂言界・海外の動きにふれ、これらの流動に重ねることによって名古屋の共同社また狂言界の映像は一層鮮明に浮び上ろうが今はその紙幅がない。前途の多幸を祈りたい。

放送は「当麻」（信高）をきき「通小町」（後藤得三・栗谷新太郎）教養特集「三浦桁園」（文語・反観と離見の見、湯川秀樹、いづれもＮＨＫ）をみる。

四月の予告

四月一日　竜吟会

半能　石橋　久田　秀雄　西村　欽也

四月十五日　観世会

能　隅田川　武田太加志　高安　滋郎

能　張良　観世鉄之丞　西村　欽也

間　佐藤　秀雄

狂　隠し狂　井上松次郎　井上礼之助

四月廿一日　梅若猶義一週忌追善会

能　安宅　梅若　盛義　高安　滋郎

間　井上礼之助　佐藤　秀雄

能　大原御幸　梅若万三郎　高安　滋郎

間　佐藤　秀雄

能　葵上　梅若　修一　西村　欽也

間　佐藤卯三郎

狂　悪坊　井上松次郎　大野弘之　佐藤友彦

四月廿二日　久田観正会

能　花月　中原　楊夫　高安　滋郎

間　佐藤　友彦

能　木曽　吉川宇良子　井上松次郎

狂　太刀奪　佐藤卯三郎　井上礼之助

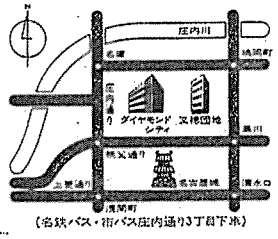
四月廿九日　幸友会

ゆたかなくらし　楽しいショッピング

木曜定休

500台収容
駐車場完備

新しい生活がある街
ダイヤモンドシティ
名古屋ショッピングセンター
名古屋市西区菊井町6-56　TEL 523-2444



（名鉄バス・市バス庄内通り3丁目下車）

狂言

昭和48年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481) 7445

狂言人語

当地名古屋の四月は、桜便りと市長選挙で幕を明けました。年々市街地の桜の色は薄れる一方とのこと。環境保全と福祉の問題が選挙の争点。事実上保革陣営の一騎討と云われるだけに、選挙戦もかなりの盛り上りを見せているようです。花と緑のめっきり少なくなった市街地ですが、それでものどかな休日の春を求めて公園に集まる家族連れの中に、宣伝車がわり込んでスピーカーの音量を上げる風景がしば〳〵見られます。何かあわたゞしい桜の季節です。

花盛り、御免あれかし松の風。
（狂・八句連歌）

さて、悲しいお報せを一つ。去る三月十四日、ワキ方高安流長老、西村弘敬師が亡くなられました。明治、大正昭和の三代にわたって脇一筋に生き抜かれた氏。その脇僧姿は小柄ながら厳しい風格と威厳に満ち、時として淡々として動ぜぬ深い味わいを見せてくだされたものです。脇として、能楽師としての知識は深く、ことに本紙「狂言」には数多くの御寄稿をいただいたものです。

過年、本紙「百年記念号」の刊行に際し、氏に名古屋能狂言界のお話しをうかゞったことがありました。遠くを見つめる様な目で淡々と尽さぬ昔語りを聞きながら、真に能一筋に生きて来られた氏の、能に対する深い愛情と、芸に対する謙虚さを知り、あらためて心あらわれる思いをしたものです。慎んで氏の御冥福を祈ります。

四月の催能

四月　一日　竜吟会
半能　石橋　久田秀雄　西村欽也
四月十五日　観世会
能　隅田川　武田太加志
能　張良　観世鉄之丞　西村欽也
狂　隠し狸　佐藤秀雄　高安滋郎
　　井上松次郎　井上礼之助
四月廿一日　梅若猶義一週忌追善会
能　安宅　梅若盛義　高安滋郎
　　井上礼之助　佐藤秀雄
能　大原御幸　梅若万三郎　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　葵上　梅若修一　西村欽也
間　佐藤卯三郎
狂　悪坊　大野弘之
　　井上松次郎　佐藤友彦
四月廿二日　久田観正会
能　花月　中原楊夫　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　木曽　吉川宇良子

狂　太刀奪　佐藤卯三郎
四月廿九日　幸友会　井上松次郎
　　井上礼之助

狂言解説

隠し狸＝主人に隠れて密かに狸を売りに市へ出かけた太郎冠者。大声で狸を売り歩く所にばったり主人と出くわしてしまいました。とっさに狸を隠したのですが……。さかんにさぐりを入れる主人と、しっぽを出すまいとする太郎冠者のかけひきが始まります。

悪坊＝壇家から帰る途中の出家に、一人の男がからんで来て無理矢理道連れとなりました。派手な格好に大長刀を振り廻し、出家の逆らわぬを良いことに散々に振舞い、遂に茶屋に寝込んでしまいました。出家は男の着物と長刀をとり上げ、代りに僧衣と傘を残して去ってしまいます——。

太刀奪＝太刀を持たぬ主従、連れ立って遊山に出かける所へ、向うから立派な太刀を持った男がやって来ます。よせばよいのに太郎冠者、太刀を奪いに出かけて逆に小刀まで取り上げられてしまいました。主従は帰り道に待伏せて取り返さんとしましたが……。

狂言巻空

野村広二

三月末、待望の雨がにわかに春を呼んで、花のたよりに心をはづませる。三十一日N教授から名古屋大学退官記念の随筆集を贈られる。上品な紫紺色の表紙に「もざいく」の題名。ご専門の栄花物語の一書・古活字版同書の集字で優雅な書体。夕方から深夜にかけて一気に読了。M教授とかって対座して、文字・芸能・人生・紀行などいろいろ対話をかわしてきた楽しい思い出にひたりながら。格調高く、あたたかくてするどく、やさしくて強く、軽味をまじえて、広い展望に、文学の深奥と文学研究の知恵を説き給う全編が心をとらえて放さない。座右の書と珍重したい。能・狂言では「興がる法師」「杜若」「香西精・世阿弥新考・けてうのことば」など。三月の狂言。十八日大蔵流狂言会・なごや会は終日などやか。伊勢の狂言師たちが「木六駄」を力演する。二十五日は中日五流能の「磁石」（千五郎・千之丞・正義）をみる。共同社は卯・松・又の三人が能三番にでて活躍。「磁石」は好演。見ているうちに西遊記を読むような気持になる。「邯鄲」の飛び込みに似たカタもあるし、三河の八ツ橋・杜若、熱田明神もでてくる。

同会で能四番をみたが、久方ぶりの「松風」（元正・関根祥六、地頭元昭）はてん綿とした情緒よりもむしろ冷めたい美しさにあふれ、「殺生石」（友枝喜久夫）は適確で冴えたわざに富み「羅生門」（厳・高安滋郎）は楽しく前半のワキの雨夜の描写、後半に登場する無言のシテの五分間は実にすばらしく、「采女」（喜之）は同氏近来にない美しい舞い振り。喜之氏は後シテの装束・白地に金模様で若草色のひものついた長絹などの工夫を前以て語られたが、竜女となり、変成男子となった采女の姿ならばあれでよいと思いながらみていた。

十四日、ワキ方高安流西村弘敬氏が他界される。享年八十五才。明治・大正・昭和と三代にわたってワキ座から

能の世界をみつめること多年。地味で滋味つきせぬ清流シワキ僧の姿はいつまでも忘れることはできまい。楽屋では心広く、やさしい大先輩で、だまって陽の当る場所に対座しているだけで心みちたりた。亡くなるまで筆を捨てず、古事を知る貴重な方の逝去が惜しまれてならぬ。紫の花、杜若やあやめがお好きだったとのこと。白い桃の花が咲きはじめる頃であった。ご冨福を祈りたい。

放送は「杜若」（緞）「大原御幸」（九郎・英雄）をきき、「熊野」（寿夫・弥一）「教養特集・京舞」（井上八千代・沼艸雨ほか、井上流と能、いづれもNHK）をみる。坂本繁二郎展（ギャラリー・ニシキヂヤ）で「能面」の画を一点みつける。本では「鷹の井と鷹姫上演」（片々録、英語青年三月）「イエーツの鷹の井正誤二・三」（学鐙二月、丸善）「名古屋狂言小劇場」（朝日、二・五）「シエイクスピア劇の翻訳」（土居光知、英語文学世界四月、坪内逍遥訳に使われた狂言のことばとしぐさの間〈ま〉）「能の絵本」（木村利行、井場書店、好著）。

「首引」と為朝伝説

狂言「首引」に登場するのは鎮西八郎為朝である。訴訟のことで永々西国にあった為朝が上洛の途中、幡磨の印南野で鬼に出逢う。姫鬼の喰い初めにせんとするが、為朝は勝負に負けたら喰われようとて、腕押し、足押し、首引をして応援の鬼共をもこと〴〵くなぎ倒す、というものである。

ところで古く、天正狂言本「首引」によれば主人公は為朝にあらず、「おね山のあら三位」という罪人（亡者）で、従ってその相手も地獄の鬼（おそらく閻魔大王）とその娘ということになっている。腕押し、座押しでは亡者が勝つが、最後の首引では、今日とは逆に一女勝つ。罪人の上へのぼる。とめ。」という次第何とも荒っぽい演出である。「亡者対鬼」では亡者、「女対男」では女が勝つのが狂言の定型だがすでに姫鬼が鬼である以上に女としての要素を強く打出す演出がとられていたものである。

この罪人と鬼という組合せが為朝と鬼に代わるのは、保元の乱で配流となった為朝が、その後鬼ケ島に渡って鬼を平げ、宝物を手に入れたという民間伝説が広まったことによる。この為朝伝説に原拠をおき、さらに狂言「首引」をふまえたものに「宝の槌」「宝笠」（隠笠）がある。都へ宝を求めに上った太郎冠者がスッパにだまされ、古笠や太鼓のばちを売りつけられるのだがその宝の仔細を問われたスッパが次の様に語って聞かせる。

〈まず昔、鎮西の八郎為朝殿が鬼が嶋へわたらせられた八聞およばれうぞ。〈いかにも聞およびました。中略）〈其時の勝負には、腕おし、足おし、首引。様〻の勝負に為朝殿がお勝なされたムウ。〈鬼神に横道なしと、蓬来の嶋の三の宝を為朝殿に渡した。（以下略）（雲形本・宝笠）

即ち田舎者の太郎冠者でさえ、この為朝伝説を聞及んでいる程一般に流布しているものであり、これをうまく狂言に取り入れたものと云えるだろう。（鈍太郎）

五月の予告

五月　五日　巽　会

能　羽衣　戸田　和　高安　滋郎
能　源氏供養　葛原　正枝　高安　滋郎
能　玉葛　植村　本子　西村　欽也
間　文山賊　井上松次郎　大野　弘之　佐藤　友彦

五月　六日　豊星会（午前十時始）

能　巴　吉川　周子　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　歌争　佐藤卯三郎　井上礼之助

五月十三日　邦謡会

能　羽衣　坂野　富子　高安　滋郎
碧　隅田川　坂川　公一　加藤井知子　高安　滋郎
能　天鼓　磯谷　行雄　彦坂　淳子　西村　欽也
間　佐藤　友彦
狂　曰真似　野村又三郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

五月　廿日　鳳鳴会　午前九時始

能　舟弁慶　山本　一　高安　滋郎
間　大野　弘之

五月廿六日　一謡会

能　班女　海田とし子　西村　欽也
間　佐藤　秀雄　佐藤　友彦

五月廿七日　観世流　流友大会

五月卅一日　大声会

狂　止動方角　佐藤　友彦　大野　弘之　佐藤　秀雄
小舞　貝づくし　佐藤卯三郎　鷲見　征之
狂　武悪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

能楽協会名古屋支部よりのお知らせ

去る四月十五日役員会において事務役割左記の通り決定致しました。

支部長　藤田六郎兵衛
副支部長　高安　滋郎　柴田初太郎
企画　梅田邦久、内藤泰二、長田　曉　筧　鉱一、鬼頭喜太郎
庶務　筧　三男、久田秀雄、後藤孝一郎　助川竜夫、井上礼之助
会計　井上松次郎、殿島修二、竹腰勝一　大塚一二、河村総一郎
記録　林甲子夫、尾関健太郎、林　鉄郎　福井啓次郎、佐藤卯三郎
監事　鬼頭八郎

商標　花甚　登録　株式会社

株式会社　花甚

本社　名古屋市中区新栄町4丁目
CBC放送局西隣
TEL 代表 (251) 0471
〒460

直売店
豊田ビル一階　TEL (551) 4587番
名駅表玄関　TEL (551) 9078番
大名古屋ビル一階　TEL (561) 5760番
中日ビル地下二階　(261) 1111－399
名駅前メルサ店　大代表 (582)－7111番

狂言

昭和48年5月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481) 7445

狂言人語

祝日法の改正により、ゴールデンウィークは、今やダイヤモンドウィークに変身したかの如く。連休、飛び石、連休と、計画を組むのも楽しいもの。野山の新緑もこゝしばらくが盛りです。大いにこの休日を満喫して下さい。

さて、今月末、三十一日には「名古屋狂言小劇場」が〈抵抗の精神・その2〉と題して第五回公演を行います。今回はこのシリーズのハイライトとも云うべき「止動方角」「武悪」という大曲を揃えました。狂言に表われる抵抗の精神とはどんな性格のものか、どんな形で描かれるか、もっとも端的に示してくれる番組と云えましょう。是非お出かけ下さい。

五月の催能

五月　五日　巽　会

能　羽衣　戸田　和　高安　滋郎
能　源氏供養　葛原　正枝　高安　滋郎
能　玉葛　植村　本子　西村　欽也
間　井上松次郎
狂　文山賊　大野　弘之　佐藤　友彦

五月　六日　豊星会（午前十時始）

能　巴　吉川　周子　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　歌争　佐藤卯三郎　井上礼之助

五月十三日　邦謡会

能　羽衣　坂野　富子　高安　滋郎
謡　隅田川　坂川　公一　加藤井知子　高安　滋郎
能　天鼓　磯谷　行雄　彦坂　淳子　西村　欽也
間　佐藤　友彦
狂　口真似　野村又三郎

五月　廿日　鳳鳴会　午前九時始

能　舟弁慶　山本　一　高安　滋郎
間　大野　弘之　井上礼之助　佐藤卯三郎

五月廿六日　一謡会

能　班女　海田とし子　西村　欽也
間　佐藤　秀雄　佐藤　友彦

五月廿七日　観世流　流友大会

五月卅一日　大声会

狂　止動方角　大野弘之　佐藤　友彦
小舞　貝づくし　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄　鷺見　征行
狂　武悪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

文山賊＝また今日も獲物を取り逃した二人の山賊。互に云い争う内、ひくにひかれず、遂に差し違えて死ぬことにしました。二人が勇ましく死ぬ訳を人に知らせんものと、書き置きをすることになりましたが、書き上った文章を読めば読む程哀れさがつのり……。

歌　争＝春の遊びに連れ立って出かけた二人の男。互にしゃくやくの花を見ては、つくしを見つけては、とんちんかんな古歌をひき、遂には歌争いからおきまりの相撲、とっくみ合いへとエスカレートしてしまいます。

口真似＝さる所から酒を贈られた主人が、太郎冠者に適当な酒の相手を招く様云付けました。所が太郎冠者が連れて来たのが近所でも評判の酔狂人。今さら追帰す訳にもゆかず、一計を案じた主人は太郎冠者に自分の口真似をする様云いつけます。

止動方角＝茶競べに出かけんとする主人。出品する茶から太刀、馬まで伯父のもとに太郎冠者を借りにやりました。やっと借り受けた道具を持ち、馬をひいて帰る太郎を主人は頭ごなしに遅いと怒鳴りつける始末。ムッとした太郎は奇妙な癖を持つ馬を幸い、主人への報復手段に訴えます。

武　悪＝不奉公者の武悪を主命で討ちに向った太郎冠者。たばかって武悪を川に連れ込み、今まさに討たんとするのですが、潔い武悪の態度にどうしても討つことが出来ず、遂にこれを逃してやりました。討ったと偽の報告を聞いた主人は気分転換に清水へ、たすかった武悪はお礼参りに清水へ。そしてばったり出くわしてしまいました……。

狂言巻空

野村広二

緑が目にところよく、梢をわたる風はさわやか。交通難でも旅情はしきりに動く。四月の東京は「翁・白式」と「羽衣」（後藤得三、喜寿記念能）、その佳演は増田正造氏の評（東京、四、十一）で知るが、これに野村狂言の会・和泉会・狂言アトリエの会、金春信高・金剛巌の会（熊野と実盛）、京都は東本願寺能。伊勢は奉納能（金春能・五日）、この頃は桜の見頃であったが不参。あとで藤田六郎兵ヱ氏に盛会の模様をおききしたが、本年第二十回を迎える奉納能で同氏が二十回連続出勤の表彰を受けられた由。お祝いを述べて、桜の花の下でおこなわれてきた楽しい思い出話を、いろいろくり返した。四月の演能から右の十に近い催し名古屋の会と鉢合わせの他の会、たとえば今井勘五郎百年祭能や金剛会（金剛能楽堂）などもいれるともっとふえようが、これらにでかけてわが見聞を広めたいとおもうし、五月は英雄（宝生会別会）金太郎（霞会）両氏の「卒都婆小町」に京都の市民狂言会（大蔵・和泉両流）、喜之氏の「桧垣」（叙勲自祝能、大阪）と奈良薪能に期待がかかる。四月は、このうち東本願寺能（親鸞上人生誕八百年記念法楽能）拝見に車中の人となる。同行三人。芸能評論家M氏と狂言が大好きなM医師。京都駅から東本願寺まで人の波。これを縫うように進むがはかどらない。表通りの銀杏の大木はもう青い芽が空にはっきり浮ぶ。廊下を廻り廻って拝見の場所白書院につく。何年振りかの舞台が今年も左右の大きな楓の緑にてりはえる。すがすがしい初番「嵐山」（今井幾三郎）おおらかな「末広がり」（千作）のあと「羽衣」（巌）。優雅な気品と匂いあふるるばかりの麗姿はたとえようがない。舞台を通り抜ける風に、ひるがえる長絹がまことに印象的。切りも見事。そして子方が充実し豪壮な

「鞍馬天狗」（片山博太郎）の後シテの出までみて、参詣人の少なくなってしづかな寺内を歩き、観能と熱した心をしづめて駅に向う。あの書院のうちから眺める、長い軒と板縁に、はさまれた舞台と長い橋掛の演能空間は、その縁先で青い空の下の舞台をみるとはちがった味わい、ゆったりとしたおちつきがあった。感銘の深い一日。四月の名古屋はワキ方西村欽也氏が張良を披く。シテ・銕之丞、後見・武田太加志氏。好演の初演梅若猶義一周忌追善能に嗣子盛義氏がたむけた「安宅」は気力十分に舞って鮮烈。狂言は、「隠し狸」（松・礼）「悪坊」（松・弘・友）「太刀奪」（卯・松・礼）それぞれ淡いおもしろさがある。

放送は「小督」（英雄）「巴」（万三郎）をきき、「杜若・恋ノ舞」（喜之）「木六駄」（万蔵、再放送）「釣狐」（万作、〃、いづれもNHK）をみる本は「私のかくれ里」（再び世阿弥を白洲正子、波三月、新潮社）「狂言」（戸井田道三、平凡社）選書、未見）「わらんべ草研究」（米倉利昭、風間書房、〃）「小説・きぬた」（立原正秋、文芸春秋、〃）。

ふくろふ

一人出て、子を山へやりて候へば、物つきがあるとゆふて、山ぶしをよび出し、さんおかせる。ふくろふのたゝりあるとゆふ。いのる。子ふくろふのまねする。おやにもつく。はらかふ〳〵〳〵や、橋の下のしやうぶはたがうへそめし、いち殿二い殿三み殿、四殿五いりまめに六ぢざう、はらかふ〳〵〳〵や。山ぶしあくびする。山ぶしにもつく。ほほや〳〵。ひやうしとめ。

以上、天正狂言本「ふくろふ」の全文である。筋立では現行「梟山伏」と殆んど同じである。登場人物は現行ではいずれも兄弟で、弟（太郎）が病人である。山伏は病人の容態を看るのにまず算木で占っている。現行では山伏が算木を置くなどは見当らないものであるが、天正本では他にも「いぐい」で居杭の所在を占う算置きが山伏になっており（現行では専門の算置きが占う）、山伏が算を置くのは一般的なことであったと思われる。

「はらかふ〳〵」は今日の「ぼろん〳〵」に相当するものである。

「いち殿」以下の文句は、たゞ数を並べて語呂を整えたものだが、天理本で指摘されている「一りけんじよ二けんじよ（中略）いたいどのたいどの）の祈り文句と似たものが感ぜられる。

最後は「ひやうしとめ」で、かけ声をかけ拍子を踏んでとめたものであろう。今日では梟の鳴真似をしながら入るものだが、雲形本でも「古風はシャギリ留也」と記している通り、古くはシャギリ留が多かったものである。

後は三人ながらないて、笛にて留ル也。中に太らテおいて、トメテから三人一度にないて入也。（天理本）

三人トモ苦ミ、楽ニホゝンヲ云テ、シテ先、次ニ兄、終ニ弟立テ順ニ一辺廻り、シテ真中、兄左、弟右ニ並ヒ、足ヲソロユルト直ニシャキリトメ。三人共走リコキニ小廻リシテ、左右へ飛、笛ヒシク時、ヘホゝントト云テシテ一人トメル。アト二人ハトント下ニロクニキ、三人共正気ニ成テ、シテ先、次ニ兄、終ニ弟、常ノ通ニ歩ミ入也。

（型付本）

名古屋狂言小劇場

第五回〈抵抗の精神〉その二

昭和48年5月31日（木）午後6時半始

名演会　館（東新町）中電ビル東

狂言　止動方角　佐藤友彦　佐藤秀雄　大野弘之　鷺見政行

小舞　貝づくし　佐藤卯三郎

狂言　武悪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

入場料　五〇〇円

六月の予告

六月三日

能　清経　塚本秀雄　高安滋郎

能　花筐　久田秀雄　西村欽也

能　邯鄲　橋岡久共　高安滋郎

狂言　昆布売　佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎

六月五日

第一部（午前十一時始）

能　花月　熊沢恵美子　佐藤友彦　高安滋郎

狂言　芥川　野村又三郎　佐藤秀雄

第二部（午前二時始）

能　熊坂　衣斐正宣　西村欽也

狂言　柑子　佐藤秀雄　井上松次郎　佐藤友彦

六月十日

狂言　和調会

六月十七日

狂言　杜若　山本博之　観世元昭　西村欽也

能　山姥　茂山忠三郎　茂山千之丞　高安滋郎

狂言　昆布売　梅若景英会

六月廿三日

能　羽衣　梅若六郎

能　安宅　梅若景英

狂言　月見座頭　山本東次郎

六月廿四日　名古屋玉鑒会

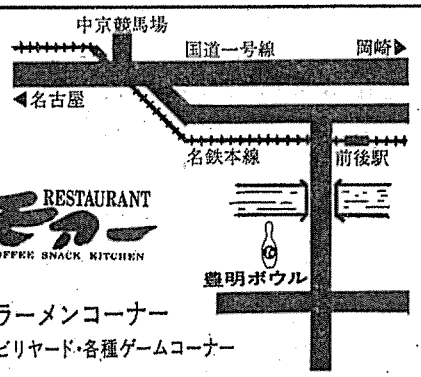
能　班女　観世武雄　高安滋郎

能　隅田川　佐藤秀雄　佐藤友彦

能　山姥　奥村富久子　高安滋郎

狂言　吃り　南条秀雄　西村欽也　大野弘之　佐藤卯三郎　野村又三郎　井上松次郎

明るく健康的な——
スポーツボウリング
豊明ボウル
井上禮之助（狂言共同社同人）
豊明市栄町上姥子（名鉄前後駅前）（0562）97－1211(代)



★ラーメンコーナー
★ビリヤード・各種ゲームコーナー

狂言

昭和48年6月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

紫陽花の花の盛りもすぎ　五月雨の間にも暑い日指がもれさす時節です。もうすぐ猛夏がやって来ます。公害と脱税と汚職と暗い社会を幾分でも浄化出来るよう　私共も精神浄化の一翼を荷って催能を計画しております。

東京では喜多の舞台開きが行はれ、三日に亘って豪華な演能が行はれました。

当地の朝日狂言会も目出度、十五回公演を迎え「花子」「狸腹鼓」の大曲二番立て　特別公演となりました。長老佐藤卯三郎氏が　若手は何してるかと斗り張切って「花子」に情熱を傾注されるに対し、京都茂山千五郎氏　の「狸」この直伝の大曲。さだめて満天下の同好の方々の絶讃を得るものと期待しております。狂言の真の面白さをこの地味な演目からみ汲とって頂きたいものです。

八月は恒例の薪能　神苑に映えるかゞり火に　吹き過ぎる涼風　おくつろぎの一刻でぜひ御観賞下さい　（曲目別掲）

尚八月三十日夜は　名演会館で第六回の大声会　狂言小劇場公演があります。名古屋狂言共同社が若手をもり立てゝこの後援です。曲目は「民話の心」とタイトルをつけて「蚊相撲」「蝸牛」「雷」三番に大野弘之、佐藤友彦、鷲見政行が打当り精一杯の熱演をみせる事でせう。何卒温かく見守って御声援下さい。

暑中御見舞

昭和四十八年盛夏

狂言共同社
名古屋和泉会

六、七、八月の催能

六月　三日　青陽会

能　清経　塚本秀雄　高安滋郎
能　熊野　花笠　久田秀雄　西村欽也
間　邯鄲　橋岡久共　高安滋郎
狂　昆布売　大野弘之　井上松次郎

六月　五日　熱田祭奉納能
第一部（午前十一時始）

能　花月　熊沢恵美子　高安滋郎
間　川野村又三郎　佐藤友彦
狂　芥川　佐藤秀雄
第二部（午前二時始）
能　熊坂　衣斐正宣　西村欽也
間　佐藤秀雄
狂　柑子　井上松次郎　佐藤友彦

六月十日　和調会

六月十七日　観世会
狂　杜若　山本博之　西村欽也
能　山姥　観世元昭　高安滋郎
間　茂山忠三郎
狂　昆布売　茂山千之丞

六月廿三日
能　羽衣　梅若景英会
能　安宅　梅若景英
狂　月見座頭　山本東次郎

六月廿四日　名古屋玉響会
能　班女　観世武雄　高安滋郎
間　佐藤秀雄　佐藤友彦
能　隅田川　奥村富久子　高安滋郎
間　山姥　南条秀雄　西村欽也
狂　吃り　大野弘之　野村又三郎
佐藤卯三郎　井上松次郎

七月　一日　桂会　雛子会
七月　八日　朝日狂言会　午后二時始
小舞　田植　和泉保之
狂　花子　佐藤卯三郎　大野弘之
狂　狸腹鼓　茂山千五郎　井上祐一
調友会　午后一時始　佐藤秀雄
七月二十二日
能　百萬　片山博太郎　高安滋郎
間　佐藤卯三郎　佐藤友彦
半能　融　片山慶次郎　井上義次
狂　祐善　井上松次郎　三宅右近
宝生会　午后一時　井上松次郎
七月二十九日
能　三輪　辰巳孝　西村欽也
間　佐藤友彦　茂山千作
狂　柑子　井上松次郎　西村欽也
能　班女　宝生英雄　高安滋郎
間　佐藤秀雄　大野弘之
狂　清水　井上礼之助　佐藤卯三郎

八月四日　薪能

八月　卅日　大声会　午后六時三十分
於　名演小劇場
狂　蚊相撲　大野弘之　井上松次郎
狂　蝸牛　佐藤友彦　佐藤秀雄
狂　雷　井上礼之助　野村又三郎
佐藤卯三郎
鷲見政行

狂言解説

昆布売＝北野の手水に出かけた大名途中出逢った昆布売を脅して太刀持ちに仕立て、家来同然に呼びつけている内、堪忍袋の緒を切った昆布売が太刀を振りかざし、今度は逆に大名が昆布を売らされる破目となります。

柑子＝前夜の宴席で主から預った珍しい三つ成りの柑子を太郎冠者はすっかり食べてしまいました。忘れていると思いきや、翌日主人は三つ成りの柑子を出せと云つけます。さあ太郎冠者の云い訳けは――。

月見座頭＝川原へ涼みに出かけた座頭月を見る事は出来ずとも、虫の音だけでもと楽しんでいる所へ来合せた男座頭の心に感じ入り互に酒汲み替わしやがて別れを告げて帰ろうとしますがふと悪戯心を起し、別人のふりをして座頭に突き当り、散々にいたぶって帰ります。独り残った座頭は――。

吃り＝いつも妻にいびられ、云い訳一つ出来ない吃りの男、今日も妻に棒で追い廻される所へ仲裁人が間に入りました。男は妻に暇をやると云うし、女は嫁入道具等を返せと云う。吃りの男は自分の主張を謡で云い聞かせる事となります――。

狂言小謡

今回の朝日狂言会には大曲「花子」「狸腹鼓」の二番に先立って、これも

めずらしい小舞「田植」が予定されている。

「田植」は「御田」とも呼ばれ、能「加茂」の替間として上演されるのが本来であるが、この曲の神官と早乙女達が合唱しながら田を植えて行く部分だけをとり上げて小舞として上演するものである。

中世以来の「田遊び」「田楽」などの神事が狂言に取入れられたもので、今日でも神の御田を早乙女が植えるという神社の行事は各地に行われているし、実際に広島県山県郡新庄村の郷社の田植神事に残された田植歌は「田植草紙」の名で知られている。

狂言小謡「田植」の直接的典拠となっているのは、平安末期の「気比宮御田植歌」で次の様に見えている。

「神の御田植は今日で候。早少女袖打ちかづいて田植よ、よ。早少女、早少女。田植ゑ、早少女。笠買うて着せうよ。笠買うてたもうなら、なほも田を植よよ。いかに早少女。てづつ山を見よかし。げにきっと見たれば、黄金の花も咲き候。米の花も咲き候。（中略）千歳々々々や、千とせの千歳や万歳〻々々々や、万代の万歳や」

（気比宮御田植歌）

「さ月の早乙女と春鶯はな、いたらじ里もなや春の鶯はな」

（前述「田植草紙」）

「君が代は白玉椿八千代とも、なにに数へんかぎりなければ」

（後拾遺七、式部大輔資業）

「早苗とる山田のかけひもりにけりひくしめ縄に露ぞこぼるる」

（新古今三、夏、大納言経信）

田植という農村の労働を扱いながらその田植歌は独自の農村の土臭から全く新しく生み出したというのではなくやはり崩壊した貴族文化の中からそのかけらを拾い集めつゝ、自分達のものとして編み直して行ったと云えそうである。

また「花子」の中では、シテが花子との一夜の逢瀬を小歌に託し、太郎冠者（実は入れ替った女房）に語って聞かせるわけだが、こゝでは一転して官能的とも云える狂言小謡の真随をたっぷりと味わうことが出来る。その一、二を紹介しよう。

「細い腰に細帯した者、のかひはなさひ、切らさしますな、しげなひたはむれはせぬものじゃ」

「身ははまぐり、文みるたびにぬるる袖かな〳〵」

「寝乱髪をおし撫でて、今帰りそふろうぞかまへて心かはるな」（以上花子）

こうした歌謡は貴族文化の代表とも云うべき和歌に対し、新しい庶民の歌謡として、連歌とも異った独自の詩型成立の可能性を内在していたとも云えるであろう。

六月下旬には東京国立劇場で狂言小謡を中心とした中世歌謡をさぐる催しが行われる予定だが、ともあれ今回の朝日狂言会でも、興味深い番組と云えるだろう。

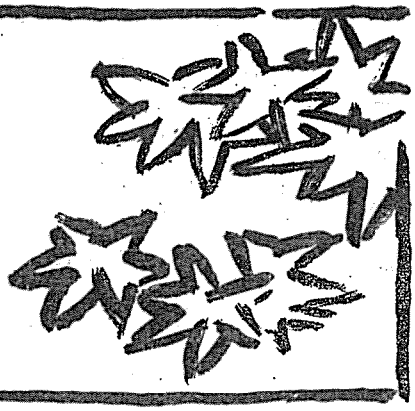
（鈍太郎）

狂言巻空

野村広二

五月三十一日名古屋狂言小劇場をみる。「止動万角」は初演の太・友彦、主・弘之、馬・政行三氏が好演、すなおな味をだしていてよかった。

その五月は京都へ二度でかける。二十一日は西本願寺の親鸞上人生誕八百年慶賛能。晴れ。平日の京都駅前は四月の日曜日の東本願寺のときよりもしづかであった。まづ楽屋に片山博太郎氏を訪ねる。杉浦友雪氏と昔話を少しくかわす。翁のような笑いが老顔に浮ぶ。高安滋郎氏が名古屋から出勤。同氏は「舟弁慶」（博太郎）のワキに出演。高安氏が三十六年の四月東本願寺の大遠忌能で「高砂」に開口をつとめた晴れの舞台からもう十年たつ。南舞台を鴻の間から拝見するが、早くから詰めかけた人達で一杯。立ったままのぞき込むように舞台をさがす。開始前枯山水の庭をみたり、ほのかな光に襖の聖人君子の古風で高尚な姿をさがしたり、うぐいす張りの板縁をふんですすみ、北舞台（国宝）を手前の板縁にすわってみ入るとき、北岸佑吉氏にお目にかかる。それからは北岸氏の丁寧な説明に甘えて心も晴れやかになる。北舞台・鏡板中央の柱・座敷舞台そのほかめづらしいことばかり。一服つけながら奈良や大阪の五流能の思い出話をなつかしむ。「八ヤシ」・花月」（友雪）「羽衣・彩色ノ伝」（観世元正）と舞台はすすみ、幾百・幾千の目が熱心に注がれる。羽衣はイロエから切りが佳。端正な姿で消え去る。シテ常座で、合掌するとき、ややワキ正の方に身体を向けたが、御影堂の方角のように思った。狂言は「水掛聟」（千作・千五郎・千之丞）。上品な笑いに一堂はゆれる。このあと楽屋で北岸・千五郎・千之丞氏らの狂言よもやま話をうけたまわって、急いで鴻ノ間に戻る。端麗重厚な「舟弁慶」。子方は四月東本願寺能のとき「鞍馬天狗」のやはり牛若であった片山清司少年。切りになってほんのひとときしぐれて見所をさわがせる座興もあった。シテは東の鞍馬天狗・西の舟弁慶ともによかった。北岸氏と大きな門を抜けて帰途につく。日は



まだ高かった。二十七日金剛会。金剛永謹（ひさのり）君の「鵜」。終始一つの流れを舞台に展開する。のびのびとして、しかも美しい古風さがあふれる。これこそ重い伝統を身につけ、そこから新しい花をゆたかに咲かせる明るさを物語っていた。これがなによりの楽しかった。

六月の東京は善竹狂言会、「茶子味梅（さすあんばい、またはちやさんばい）」が野村狂言の会と和泉会の双方で舞われるし、喜多六平太記念新能楽堂が完成、落成披露能が催される。京都では五月の奈良の薪能につづき、各地にさきがけて薪能が催される。さて名古屋の七月は朝日狂言会が第十五回の公演を迎える記念の月となる。三十四年に故歌村彦四郎氏が朝日新聞・共同社共催で開く。当時は熱田神宮能楽殿の演能が中心。その前後は朝日五流能・中日五流能・中日狂言会・名匠鑑賞能で東西狂言師のすぐれた狂言がみられたが、そこえ大蔵・和泉二流による狂言だけの会をつくり、名古屋の狂言新百年の道をひらいたのは歌村氏の賢明な遺望であった。第一回は故善竹弥五郎翁が「福の神」を演じ、その大きな風格が決して忘れることのできないすばらしさで一堂を圧した。この巨峰も四十一年歿、弥五郎翁と親交のあつかった歌村氏もそれに先き立ち三十九年に逝去。爾来名古屋の狂言が故人の遺志を継いで今日まで大きな足跡を残してきたことは言うまでもない。同氏はこのあと、名古屋和泉会もつくり別にやるまい会（野村又三郎）がおこなわれることになる。この三つの狂言会が三つ巴となり、朝日狂言会はその先頭に立ち、名古屋の能界とともに歩み、狂言を愛するという同じ目的で進んで今日に至る。今では名古屋狂言小劇場・大蔵などや会もこれに参加して狂言の楽しさを大呼し、またつつしみ深く物語る。朝日狂言会第十回までの推移は「能狂言」（名古屋、竹尾邦太郎、創刊号）にくわしいが全体地味で飾らず格調高いなかに大曲・稀曲・佳曲を演じて、狂言のよさをみせてきたのが特色といえようその前途の多幸を祈りたいものです。

五月一日熱田神宮舞楽神事。陵王と落蹲をみる。陵王の太鼓の音が。たまらなく心をゆさぶる。九日、名古屋の国文学者石田元季先生の歿後三十年記念展をひらく蓬左文庫へ。大勢の遺墨展見学者の肩越しに「矢車や太閤様の尾張野に」の小軸が目に止まる。岩波文庫本・鶉衣も。つづいて同じ棟の東図書館の記念講演会に席を占める。終りに教え子であった古川久氏が石田先生と謡のことにふれられた。父上より京観世をおそわり、橋弁慶の子方もつとめられた由。休憩のときわたくしの中学の大先輩である古川氏と遠い昔の若い思い出話と狂言のことにしばらく時をいただいた。下旬、高橋進氏（宝生流

第八回

名古屋薪能

とき　昭和四十八年八月四日（土）午后五時三十分始
ところ　熱田神宮　神楽殿前仮設舞台

仕舞
（巻）**加茂**　前田茂穂
（観）**雲雀山**　高木美智子　有賀滋子
（観）**富士太鼓**　片野東四郎
（剛）**松虫**　殿島修二
（巻）**野宮**

舞囃子
（観）**鶴亀**　柴田初太郎　笠鉱一　後藤孝一郎　山口義郎　藤田六郎兵衛
（宝）**杜若**　内藤泰二　西村欽也

―火入れ式―
御挨拶　舞囃子　長谷権宮司　本山名古屋市長

（巻）**阿漕**　長田驍　福井啓次郎　笠鉱一　野崎太郎　笠三男
（和泉）**蚊相撲**　狂言　井上礼之助　大野弘之　佐藤秀雄

能
柴田収武　前野郁子　高橋瞭一　梅田邦久
（観）**土蜘蛛**　高安勝久　高安滋郎　飯富雅介　佐藤友彦　吉田定男　田鍋洋一　池田鬼頭　茂季信

附祝言

前売券　六〇〇円　当日券　八〇〇円　前売学生券　三〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　熱田神宮能楽殿事務所　松坂屋・オリエンタル中村・丸栄・名鉄　アサヒサービスコーナー　各プレイガイド

俳号すゝむ）の同集上梓を知り、内藤泰二氏のとりなしで、貴重な一冊の恵与をうけた。小型の控え目でしかも、しゃれた本。大正十二年から昭和四十六年まで。冴えかえり、また大雪の梅椿」能すみてゆるみし心花の宴」花吹雪している能の楽屋かな」装束をつけてみている落花かな」僧ワキに地謡に花吹雪かな」菜の花の未だ蕾の緑かな」禅寺のどこやら徹びてある如し」野宮をつとめしよりの秋深し」三番踏む汗の万蔵なりしかな」ツレ小面シテ痩男能の秋。失礼ながら勝手に年代順にひかせていただいたが、まるで昨年のテレビ能「藤戸」（NHK）のように句謡同境の好著を得てうれしかった。

放送は「網ノ段」（謙三）「猩々」（弥一）「小謡・猿聟」（弥太郎）をきき、「文化展望・太鼓のひびき」（石橋八静夫・元信）、三隅治雄ほか、いづれもNHK）をみる。本は沼艸雨氏より「異流共演の狂言・武悪」（関西五月の狂言と能、サンケイ、五・三一）をおくられる。「伎楽とギリシャ系統の芸能」（伎楽と舞楽・能楽の相異新関良三、学鑑三月、丸善、第一回）「撩乱の花」（松本長の伝記物語、大河内俊輝、角川書店）「志賀さんの生活」（奈良と金春栄治郎の将棋、滝井孝作、東京、六・五、第十回）など。

お詫び。四月号でM教授（二か所）一か所がN教授になっていました。お詫びして訂正します。

随想1（在所の者）

五十年をふりかえって

狂言も百五十号を数えまして曲りなりにも前途に見透しがついて来ました。時代の流れもスピードアップ私も早還暦をすぎました。近頃になって、やっと少々落付きをとりもどしたので、この機会に狂言の紙上を借り、とりとめもなく、思いついた儘を書いてみたいと思って紙面に余裕のある限り穴うめのつもりで筆をとります。

大正の末から昭和の初めは共同社の全盛時代でした。元老角洲宣、河村鍵三郎、伊勢門水・初代井上菊次郎の巨頭を筆頭に二代目井上菊次郎、全新三郎、歌村彦四郎、佐藤卯三郎、桜山壮次河村丘造等の中堅、野崎達次、井上松次郎、全文三、井上礼之助、私等の雑兵と、まづ〳〵メンバーの数も揃っていましたし楽屋の中でも別格扱でした。我々小供組はきうくつな楽屋を逃げ出して、お庭でドタバタ、廊下でドタバタ、イヤ早叱られたものです。しかしお稽古はきびしかったし、後見に並ばされて先生方の狂言を、イヤと言程みせられました。キッチリと後見座に並んで、目玉を動かすな。両手は必らず袴の中へ入れる。扇子は右脇へおく。頭を動かすな。と注意されて堅くなって座っていて、いざ立とうとするとシビレがおこって立つのがヤット。こんな失敗も今から考えるとなつかしいことです。

その頃は保能会と云うお素人会があり之が私共の唯一の発表の場でした。狂言はオモの名のみ印刷され、間は書出し間のみしか名前は出ません、しかし私共は、メリハリの稽古は間が一番と云う事で、居語りの役をドン〳〵つけられました。もっとも六ケ敷い三番目もの等はとうてい廻って来ません。早打、立シヤベリ、簡単な居語、名所おしえ。所謂所の者です間語りは只一人です。聞いてる人は見所を初め、もっとも身近に地謡、お囃子、お後見が同一舞台にあります。

何か間違いはしないかで精一杯、何を言ったのかわからぬ程緊張して一番すませ入って楽屋で先生方に挨拶をすませ、後がすんで入られたお脇様に挨拶をしてホットする。そんな事をくり返している内に楽屋で種々と耳に入るのは「誰それの間は何を云ってるのかわからん」「又誰それのはダラ〳〵と引のばしてる丈けで、一寸も面白くない」「眠くなる」「無い方がマシだ」とか地謡方、お囃子の話声。成程見所は間語りが中入りに立上るとガヤ〳〵ゾロ〳〵と立って空席が多くなる。ソリヤ能と同じ事をシヤベル丈けだもの立つのは当り前、前後のつなぎだけぢゃないか当然だ。アンナ独りきりで面白くも何ともないものを、どうして狂言方でやらねばならぬのか、つまらんどっちしても稽古の延長だぐらいに思ったのは若気の至りだったのです。

（つづく）

随想 2

（在所の者）

「安宅」の能があった。先代梅若万三郎氏の弁慶だった、関付で出た河村丘造氏が、すんでから「今日は物凄く緊張した、万三郎師の「その切ったる山伏は判官殿か」とつめよられた時、思はずその顔付きと気迫に押されてしまって、あれ程恐ろしかった事はなかった」と云はれたのを聞いて、成程、気合と意気込みと云うものは役になり切る精神がその空気を造るのだナと思った。そうすれば間語りだって、上手に語れば聞いてくれる人も出て来るはづだ。間語りの文句だって語りようによっては面白く聞けるはづではないか、たとへ出来ないまでも研究してみよう狂言は相手がある。二人で意気がピタリと合へば面白さの出し方も割に楽である。しかし間語りは別だ、独り切りだ、狂言だつたら相手に迷惑をかけては悪い――折角相手がこうと思つて出してくる気分を、こちらが水を指す様な空気にする場合も出て来る、しかし間語りは独り切りだ、迷惑はお脇様にはかゝらぬ、受け答えがしっかりすれば大丈夫、よし一番やってみるか。

ところがドッコイ、そんなに簡単ではなかった。「間語りで能の雰囲気が前後チグハグになる云々」と云う話を誰かから聞いた？　何かで読んだのかしれない？　でハッと思った。正に本末転倒だ。能あっての間語りではないか、独りだけいゝ子になっていると思った自分に腹が立って来た。いかにもそうだった、だからこそ未熟な奴に、かつら物の語りはさせられぬと云はれた事が今納得出来た。育ちの違った者には到底わからぬ。零団気がつかめぬのだ。勉強〳〵と悟った時古文を読んでその雰囲気をたとへ少しでもわかりたいと、それから関係のある本を読みあさり初めたのだ。源氏物語・平家物語義経記・源平盛衰記・為朝記・今昔物語と段々読みつづけて行った。

九月の予告

九月二日
大衆能

九月九日
観世会　素謡会

九月十五日
鸞雲会

九月十六日
中部金剛会
能　蟬丸　石浜明子
日比野恵昭
高安滋郎
間　井上松次郎

能　蟻通　豊島弥左エ門
西村欽也
間　佐藤秀雄

能　花筐　金剛巌
高安滋郎

狂　栗焼　井上礼之助
佐藤卯三郎

九月廿三日
宝生官実運合素謡会

九月卅日
談交会
能　邯鄲　佐藤友彦

大衆能

昭和四十八年九月二日（日）午后一時始
於愛知文化講堂

能組

仕舞
（観世）班女　シテ　服部紗枝
（観世）唐船　シテ　加藤良久
（観世）邯鄲筒　シテ　河村鉦二
（観世）井筒　シテ　杉村竹翠

舞囃子
（宝生）高砂　シテ　内藤泰二　大鼓　筧鉱一　小鼓　田鍋洋一　笛　鬼頭喜太郎　鬼頭季信

能
（喜多）巴　前シテ　里女　後シテ　巴御前　長田驍
ワキ旅僧　高安滋郎　大鼓　吉田定男　小鼓　山口亮　笛　藤田六郎兵衛
間　里人　佐藤秀雄
仕舞
（観世）三輪　シテ　柴田初太郎

能
（金春）葛城　前シテ　里女　後シテ　葛城ノ神　本田光洋
ワキ山伏　西村欽也　大鼓　筧鉱一　小鼓　後藤孝一郎　笛　藤田昭彦
間　里人　井上松次郎
狂言
（和泉）六地蔵　悪者　野村又三郎　田舎者　井上松次郎　悪者　井上礼之助　〃　佐藤友彦　〃　大野弘之
舞囃子
（金剛）山姥　シテ　大塚一二　大鼓　吉田定男　小鼓　福井啓次郎　笛　鬼頭八郎　鬼頭季信
能
子方　花若　ツレ友治ノ妻　河村真之介
シテ友閑　久田秀雄
佐藤太俊
（観世）望月　ワキ秋長　高安滋郎　大鼓　河村総一郎　小鼓　柳原富司忠　笛　筧助川三男　竜夫

附祝言

従者　佐藤卯三郎
会員券　一、三〇〇円　晋通席一、〇〇〇円　学生席五〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　熱田神宮能楽殿　松坂屋、オリエンタル中村、丸栄、名鉄アサヒサービスコーナー、各プレイガイド

狂言

昭和48年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上松次郎方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

九月の声を聞く頃になると、朝夕はめっきり涼しくなります。せみの声もジージーと云う暑苦しさから、いつかツクツクホーシに替わり、夕暮に虫の声を聞く様になるともう秋です。

九月初旬、恒例の「大衆能」でふたをあける本年後半の演能も話題が一杯楽しみな催しが計画されています。第十三回を迎える「和泉会」は別掲の如く、今回は三宅藤九郎師を迎え、宗家保之師、野村又三郎師と共同社全員が顔を揃えての公演です。三宅藤九郎師はこの会で「川上」を演じますが、これに先たって九月の十五日「靄雲会」では、野村万蔵師の「川上が上演の予定です。現狂言界の最高峰にある二師の芸を、はからずも前後してこの和泉流だけの名曲で鑑賞出来ることとなりました。大いに御期待下さい。

九月の名古屋労演にて初めて例会として狂言が取上げられました。大蔵流茂山千五郎、千之丞氏等による「棒縛り」「濯ぎ川」「彦市ばなし」の三番です。能狂言をより多くの人に観てもらうためには、今回の企画は画期的なものでもあり、その盛会が大いに期待されるものです。

九月の催能

九月　二日
大衆能　於文化講堂
能　巴　長田　暁
　　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
能　葛城　本田　光洋
　　西村　欽也
能　井上松次郎

九月　九日
観世会　素謡会

九月十六日
中部金剛会
能　蟬丸　石浜　明子
　　日比野恵昭
間　高安　滋郎
　　井上松次郎
能　蟻通　豊島弥左衛門
　　西村　欽也
能　花筐　金剛
狂言　栗焼　井上礼之助
　　佐藤卯三郎

九月廿三日　宝生宮実連合素謡会
九月　卅日　淡交会
能　邯鄲　伊藤　長八　西村　欽也
間　佐藤　友彦

昭和四十八年度名古屋市民芸術祭
第十三回
和泉会

日時　昭和四十八年十月十日　午后二時始
場所　熱田神宮能楽殿

素囃子　**鞨鼓**　番組
大鼓　兵庫三郎
小鼓　和泉　保之
笛　奉行　井上松次郎

牛盗人
太郎冠者　佐藤　友彦
次郎冠者　大野　弘之
子　今枝　郁雄
主　井上　祐一
酒屋　佐藤　友彦

千鳥
太郎冠者　井上礼之助

―休憩―

川上
座頭　三宅藤九郎
オシ　佐藤　秀雄
妻　和泉　保之

三人片輪
座頭　野村又三郎
イザリ　佐藤卯三郎
　　有徳人　大野　弘之
（閉会　午后四時三十分）

会費　指定席　一、二〇〇円
自由席　八〇〇円　階上席　五〇〇円
取扱所　各出演楽師宅。松坂屋　オリエン　タル中村　丸栄　名鉄各プレイガイド　アサヒサービスコーナー（朝日新聞名古屋本社玄関内）
事務所　中区裏門前町五―二　井上松次郎方　電話(321)―一四三〇

厳　高安　滋郎
　　佐藤卯三郎

狂言解説

六地蔵＝六地蔵堂を建立し、仏を求めに都へ上った田舎者に、スッパがまんまとわたりをつけました。仲間の三人を地蔵に仕立て所を変えて三体づつ拝ませようとたくらんだのですが……。

川上＝霊験あらたな川上地蔵に祈誓をかけた座頭、地蔵のお告げによれば今の妻が悪縁だから別れよとのこと。恐る〈妻に相談すると、烈火の如く妻は怒り出します。結局地蔵のお告げに背き妻と添い遂げる決心をした座頭は、再び盲目の身となり、妻に手をとられて帰って行きます。

栗焼＝丹波の叔父の許から贈られた栗を焼く様に云付けられた太郎冠者、栗を焼く内、あまり美味そうなのにこらえ切れず、一つ手をつけたが最後、口を離されずに遂に全部食べてしまひました。さあ、この云訳には……。

狂言巻空

野村広二

八月三十日の大声会・狂言小劇場がすむと、名古屋の演能も秋の季節を迎える。九月に入ってすぐ二日に大衆能がある。東京・能楽タイムズ（九月）は秋の多彩な動きを紹介し、一読胸をおどらせる。

さて去る六月にさかのぼって、その月の能は山姥・白頭（元昭）、安宅・延年ノ舞（景英）がすばらしい。景英君の安宅は盛義氏の安宅（勧進帳、四月）の鮮烈にくらべて重厚感あふれる。後半「心なくれそ呉織（くれはとり）」で舞台の山伏たちに橋掛から呼びかける姿は好演の一こま。そして二十五日に父上六郎氏の同曲をテレビ、（芸能百選、NHK、放送は以下おなじ）でみたのも興が深い。同日の狂言は月見座頭（山本東次郎・則直）。昨年秋和泉会の大蔵弥太郎・善竹忠一郎両氏の所演につづいて狂言愛好者をよろこばせた。古風でしかもやわらかくまとめられていてよかった。なおその当日（二十三日）は、ラジオで大江山（巌）をきき、翌二十四日はテレビで石橋・大獅子（元正・元昭・清和・清顕日本の芸能）、二十五日、前記の安宅（六郎）をみる。連日楽しかった。また二十四日の山姥・白頭（南条秀雄、女の一生の能の三番目）の切りで大小前唐織を被ってうづくまり、次にそれ

を脱いで、やがて橋掛え去って行くまで、久方振りにこの型をみた。かって猶義さんの山姥のこの演出が今でも記憶にあたらしい。七月は第十五回を迎えて花子（和）狸の腹鼓（蔵）の大曲二つを披露し盛会だった朝日狂言会についで調友会（二十二日）。名古屋の囃子方諸氏が終始力を合わせてつとめた舞台に好感が持たれた。百万・法楽ノ舞（博太郎）半能・融（慶次郎）も佳篇。狂言は祐善（松・礼）を出したがその力演が印象に残る。そして宝生会（二十九日）の班女（英雄）。格の大きさ・底の深さに敬服した。すばらしい。月末井上松次郎氏が、松山ほか四国五ケ所で催された青少年芸術劇場（能・狂言）に参加。棒縛をつとめる。

朝日狂言会のことは朝日新聞（七・九夕刊）にくわしく書いたが一つだけこえしるしておきたい。それは狸腹鼓（千五郎・千作）にアシライをつとめた藤田六郎兵衛氏の笛のことである。もともと和泉流の同曲に吹く一子相伝の笛。これを今の名古屋でおききになっている方は多くあるまい。今回は関係者の申し合せで大蔵流のこの曲に吹かれることになって大いに期待した。アシライの笛はこの期待にこたえてくれた。いつもの太鼓の入る明るさとはまた別の明るさが、かもしだされて大層よかった。これが生きているうちに聴けて何とも嘯れやかだった。

放送は落語・舟弁慶（桂小文枝、放送演芸会）をきき、劇映画「マンガ・殺生石」（岡本綺堂原作・吉岡道夫脚色、名古屋テレビ）をみる。本は大蔵たより（四四号、追憶・大蔵弥太郎、居語雑考・山崎有一郎ほか、寄贈）、「ドラマのなかの時間」（釣狐の後見座の万蔵、尾崎宏次、七・二五朝日）「四角と円」（四角な能舞台、野水信あじくりげ七月号、東海志にせの会）室町小歌発表会（六月の国立小劇場、六・二六朝日と芸術新潮八月号）文学（能楽研究の展望ほか、五篇、七月号岩波書店）紹介・日本芸能の主流＜志賀剛＞と、日本芸能の源流＜浜一衛＞（井浦芳信、国語と国文学五月号、東大国語国文学会）田遊びの狂言＜金井清光＞・笈の小文の謡曲構成＜高橋庄次（同八月号）「日本文学における性と愛・能と狂言」（第21回、中村真一郎八・二八朝日）など。

秋の演能に期待をかけたい。

十月の予告

十月
- 六日　修諷会　八時四十分始
- 鬘　三輪　伊藤恵美　西村欽也
- 間　佐藤友彦
- 能　舟弁慶　社本きみゑ　高安滋郎
- 間　佐藤秀雄
- 狂　雁礫　井上松次郎　佐藤卯三郎　井上礼之助

十月
- 七日　九皐会　十時始
- 能　乱　田中きんと　高安滋郎
- 狂　腰祈　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

十月
- 十日　和泉会　二時始
- 狂　牛盗人　和泉保之　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之　今枝郁雄
- 狂　千鳥　井上礼之助　佐藤友彦　井上祐一
- 狂　川上　三宅藤九郎　和泉保之
- 狂　三人片輪　佐藤秀雄　野村又三郎　佐藤卯三郎　大野弘之

十月十三日
- 能　弱法師　片山慶次郎　高安滋郎
- 間　大野弘之

十月十四日　観衛会
- 能　半部　加納保一　西村欽也
- 間　佐藤友彦
- 能　藤戸　加藤歌子　西村欽也
- 間　井上松次郎
- 狂　昆布売　大野弘之　佐藤友彦

十月十八日　麦の会　午后五時卅分始
- 能　花月　和島富太郎　西村欽也
- 間　野村又三郎
- 能　鉄輪　辰巳孝　高安滋郎
- 間　佐藤秀雄
- 狂　不見不聞　野村又三郎　井上礼之助
- 間　井上松次郎

十月廿一日　青陽会
- 能　鉢木　佐藤太俊　高安滋郎
- 間　井上礼之助　佐藤友彦
- 能　雲林院　河村鉦二　西村欽也
- 間　佐藤秀雄
- 能　殺生石　武田志房　高安滋郎
- 間　井上松次郎
- 狂　狐塚　佐藤卯三郎　佐藤友彦　大野弘之

十月廿七日　猶諷会
- 能　卒都婆小町　杉田合子　高安滋郎
- 能　葵上　奥田敏子　高安滋郎
- 間　佐藤友彦
- 狂　萩大名　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

十月廿八日　邦謡会
- 能　三輪　北洞節子　高安滋郎
- 間　野村又三郎
- 能　半部　丸井寿子　高安滋郎
- 間　佐藤秀雄
- 能　葵上　田川富士子　西村欽也
- 間　井上礼之助
- 狂　竹生嶋参　大野弘之　井上松次郎

十月廿八日　於岡崎　随念寺
- 能　半部　佐藤秀雄
- 間
- 能　巴　佐藤友彦
- 間
- 狂　鬼瓦　佐藤卯三郎　井上松次郎

皮膚科　泌尿器科

大野皮膚科医院

医学博士　大野弘之（狂言共同社同人）

診療時間　午前 10時～午後1時　午后 3時～午後6時

名古屋市西区香呑町6—56
ダイヤモンドシティー4階
名西医療センター

木曜・祭日・土日曜午后・休診

電話（052）531—5553

昭和48年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

秋たけなわ、演能の数も多くを数え芸術の秋にふさわしいこの頃です。

二〇年に一度の伊勢神宮式年遷宮もこの十月、これに伴う奉祝行事が数多く計画されておりますが、能楽の奉納も十、十一月にかけて参集殿舞台にて多く計画されております。

さて十月十日は恒例の和泉会、今回は三宅藤九郎氏の「川上」を始め、子方（今枝郁雄・初舞台）が活躍する「牛盗人」など話題も豊富です。是非おでかけ下さい。

十月十日から十日間は名古屋祭が華かに行われます。その華やかさのかげにひっそりかくれた話題は、祭の行事として親しまれて来た花電車が今年限りらしいということです。永い間市民の足として親しまれた市電も、都市交通合理化の計画の中で、数ケ月後には全廃されるとのこと。華やかに化装してねり走る花電車に一しおあはれさが感じられることでしょう。

十月の催能

十月　六日　修羽会　八時四十分始
能　三輪　伊藤　恵美　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能　舟弁慶　社本きみゑ　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　雁礫　井上松次郎　佐藤卯三郎　井上礼之助

十月　七日　九皐会　十時始
能　乱　田中きんと　高安　滋郎
狂　腰祈　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

十月　十日　和泉会　二時始
狂　牛盗人　和泉　保之　井上松次郎　佐藤　友彦　大野　弘之
狂　千鳥　井上礼之助　佐藤　友彦　井上　祐一　今枝　郁雄
狂　川上　三宅藤九郎　和泉　保之
狂　三人片輪　佐藤　秀雄　野村又三郎　佐藤卯三郎　大野　弘之

十月十三日　片山能
能　弱法師　片山慶次郎　高安　滋郎
間　大野　弘之

十月十四日　観衛会
能　半都　加納　保一　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能　藤戸　加藤　歌子　西村　欽也
間　井上松次郎
狂　昆布売　大野　弘之　佐藤　友彦

十月十八日　麦の会　午后五時卅分始
能　花月　和島富太郎　西村　欽也
間　野村又三郎
能　鉄輪　辰巳　孝　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　不見不聞　野村又三郎　井上礼之助
間　井上松次郎

十月廿一日　青陽会
能　鉢木　佐藤　太俊　高安　滋郎
間　井上礼之助　佐藤　友彦
能　雲林院　河村　鉦二　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　殺生石　武田　志麿　高安　滋郎
間　井上松次郎
狂　狐塚　佐藤卯三郎　佐藤　友彦　大野　弘之

十月廿七日　猶諷会
能　卒都婆小町　杉田　合子　高安　滋郎
能　葵上　奥田　敏子　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
狂　萩大名　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

十月廿八日　邦謡会
能　三輪　北洞　節子　高安　滋郎
間　野村又三郎
能　半都　丸井　寿子　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
能　葵上　田川富士子　西村　欽也
間　井上礼之助
狂　竹生嶋参　大野　弘之　井上松次郎

十月廿八日　於岡崎　随念寺
能　半都　佐藤　秀雄
間
能　巴　佐藤　友彦
間　佐藤卯三郎
狂　鬼瓦　井上松次郎

狂言解説

雁礫＝狩に出た大名、立派な雁が池の端に羽根を休めるのを見つけ、これ射んとしましたが、通行人が先に礫を打って倒してしまいました。さあ大名は俺がすでにねらい殺しておいた雁だと主張しますが……。

腰祈＝修業を終えたかけだしの山伏今日は百歳に余る祖父を訪ねます。見れば祖父の腰が曲り、いかにも不自由そう、そこで習い覚えた祈祷で祖父の腰を伸ばさんとするのですが……。

昆布売＝供を連れずに外出した大名通りがかりの昆布売に無理矢理太刀を持たせ供にしたてたのですが、腹を立てた昆布売に持たせた太刀で逆におどされ、今度は大名が昆布を売らされる破目となります……。

不見不聞＝山一つ彼方へ外出する主人つんぼの太郎冠者では心許ないと、座頭の菊市に合留守を頼みました。さあ留守番のつんぼとめくら、互いに相手の不具をよいことにからかい合いを始めてしまいます……。

狐塚＝狐塚の田へ番にやられた太郎冠者、夜に入って見舞に来た次郎冠者主人を狐と間違え次々に縛り上げ、松葉でいぶして正体を現せと責め上げます。遂にたまりかねた二人は狐の鳴声で応えると、今度は皮をはがんと鎌を取りに出かけます……。

萩大名＝永の在京の大名、今日は清水へ遊山に出かけ、茶屋の庭先に腰をかけました。庭は萩の花の真盛り、茶屋の所望に応えて、かねて太郎冠者から教えられた萩の花によそえた歌を詠むことになりましたが……。

竹生島参＝主人に無断で竹生嶋へ抜け参りをした冠者、主人の怒りにふれ手討にならんかの所を許されました。今度は主人の機嫌をなおさんものと、聞き覚えた秀句で竹生嶋参りの様子を語らんとしますが……。

鬼瓦＝はるか遠国の大名、晴れて帰国を控え、在京の間詣でた因幡堂にお礼参りに出かけます。御堂を巡る内、突然大名が何を想ったか泣き出します見れば大名の指さす先に鬼瓦がいかつい顔でにらんでいました……。

狂言卷空

野村広二

秋がやってきた。九月、下旬には金木犀の匂いが物思う秋の心に重く沈んだ甘さを興える。漬けなすも好味、栗も日増しにうまくなる。春は沈丁花、夏はくちなし、そして秋のあの匂いがただよう頃になると、能も盛んになってくる。去る二日の大衆能は今年も盛会。狂言は「六地蔵」（又・松・礼・友・弘）。広い舞台を巧みに動いて大きな笑いをまき起こす。中旬野村万蔵氏が来名（鼓雲会）、「川上」万・万之介）を演ずる。「余分なことはせず手は抜かず、それで効果をあげる」と楽屋で語る同氏のことば通り、一見平常の立居振舞のようで、その実磨きぬかれた芸のうまさに人間の心の深さを感じた。夫婦の古風でしかも真実あふれる情愛を量感をもって描き、狂言のよさをかみしめさせてくれた。この曲はもう一度十月に三宅藤九郎氏（名古屋和泉会）でみることができる。こういった落ちついて影のある曲の秀逸さが二長老で二度味える年は特筆に価しよう。この翌日中部金剛会で季節感に富む「栗焼」（礼・卯）をみる。ねばらずしみじみとしていたのがよい。能は「蟻通」（シテ・豊島弥左ヱ門、ワキ・西村欽也）が久方ぶりに舞われる。佳作。前半欽也氏のワキ座あたりのシグサも好い。巌氏の「花筐」も佳篇。六月の「班女」（英雄）、この「花筐」の二つが名古屋の演能記録を豊かにしたことを大きく書き添えたい。さて、名古屋狂言小劇場の第六回、今年の終回が八月三十日におこなわれた。毎回一つのテーマで舞台を貫く好演目に狂言愛好者を満足させできたが、今回も上演の三番（蚊相撲・蝸牛・雷）を据えて、そのねらいとする所をすなおな笑いで盛り上げていてよかった。来年もすこやかな展開を切に希望したい。十月は、下旬の東京で二十六日野村狂言会（別会）翌二十七日和泉会（別会）がおこなわれる。前の日は「太鼓負（たいこおい）」の稀曲、後の日は「花子」（保之）に「那須語」（千作）がでる。岩波ホールでは、九月開講の「講座・狂言」の第二回が十九日に講演と実演で開かれる。月一回、五回の予定で来年一月まで。今年の芸術祭参加の演能もいよいよはじまる。多彩である。

放送は「張良」（シテ・喜多実、張良・宝生弥一）「地方に生きる伝統芸能・舞楽」（教養特集、舞楽の舞台は四角など、三隅治雄ほか）をみ、「通小町」（山本博之）、「天鼓」（武田太加志、いづれもNHK）をきく。本は「女と影—能・バレエ・モダンダンスで」（三巍演、演出・出演者とも名古屋を中心に活躍、朝日、九・八）「日本海文化圏への試論・上」（佐渡の世阿弥の墓、鈴木進、東京、九・二〇）「芸能歳時記」（〈四〇年〉八・三）「二元正アテネ公演、〈三二年〉九・四観世喜文〈喜之か〉国際ペン大会出席者に演能、〈十年〉九・一四桜間金太郎〈弓川〉葵上撮影テスト、〈二一年〉一〇・一六平太芸術院会員になど、矢野誠一、三一書房）「宮田雅之きりえ画集」（能画一葉、同氏、講談社、乞高覧）など。

十一月の予告

十一月四日　風韻会

能　田村　鬼頭貴代子　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能　野宮　佐藤アヤ子　高安　滋郎
間　大野　弘之
能　菊慈童　三木美智子　高安　勝久
狂　文荷　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

十一月十一日　やるまい会

狂　鍋八撓　野村万之丞　三宅　右近　井上松次郎
無布施経　野村又三郎　野村　万作
膏薬煉　茂山千五郎　茂山　正義
闘罪人　野村　万作　野村万之丞　三宅　右近　井上礼之助　井上松次郎　佐藤　友彦　佐藤卯三郎

十一月十八日　観世会

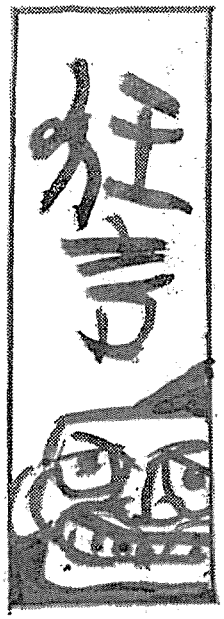
能　江口　梅若　六郎　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　善知鳥　片山博太郎　西村　欽也
間　大野　弘之
狂　鐘の音　佐藤　秀雄　井上礼之助

十一月廿三日　邦謡会

能　鶴亀　妹尾　久　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　蝉丸　今枝　行夫　西村　欽也
間　岡谷　薫
能　舟弁慶　佐藤卯三郎　高安　滋郎
間　浅井　栄子　須部　甫
狂　鳴子遣子　大野　弘之　井上松次郎
佐藤　友彦

メモ欄

徳田税務会計事務所　名古屋市守山区吉根笹ケ根 557
税理士　徳田文夫　電話 052—736—2634



昭和48年11月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上直兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(481)7445

狂言人語

寒くなりました。中東戦争のあおりで石油危機が叫ばれ、世界一と云われる最近のインフレ傾向がこれに輪をかけて、冬に備える暖房用の燈油、重油類の心配が現実となって来ました。トイレットペーパー、砂糖、洗剤、その他の日用品の不足など、一体どうなっているのか首をかしげる此頃です。

さて、今月は今年最后の狂言会「やるまい会」が十一日に催されます。野村又三郎師の主宰に、野村万之丞・万作兄弟、三宅右近、茂山千五郎・正義親子、そして井上松次郎以下の共同社も賛助出演し、多彩な舞台が繰り拡げられます。是非ご覧下さい。

十一月の催能

十一月四日　風韻会

能　田村　鬼頭貴代子　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能　野宮　佐藤アヤ子　高安　滋郎
間　大野　弘之
能　菊慈童　三木美智子　高安　勝久
狂　文荷　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

十一月十一日　やるまい会

狂　鍋八撓　野村万之丞・三宅　右近　井上松次郎
無布施経　野村又三郎　野村　万作
宥薬煉　茂山千五郎　茂山　正義
闇罪人　野村　万作　野村万之丞　三宅　右近　井上礼之助　井上松次郎　佐藤　友彦　佐藤卯三郎

十一月十八日　観世会

能　江口　梅若　六郎　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　善知鳥　片山博太郎　西村　欽也
間　大野　弘之
狂　鐘の音　佐藤　秀雄　井上礼之助
邦謡会

十一月廿三日

能　鶴亀　妹尾　久　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　蝉丸　今枝　行夫　西村　欽也
間　岡谷　薫
佐藤卯三郎
能　舟弁慶　浅井　栄子　高安　滋郎
間　須部　甫
井上礼之助
狂　鳴子遺子　大野　弘之　井上松次郎
佐藤　友彦

狂言解説

文荷＝近頃稚児狂いの目に余る主人今日も二人の冠者を稚児の千みつ殿のもとへ文の使に出しました。使の二人は文を肩担って行きますが、余りの文の重さに遂に開いてしまいます。文の重いも道理、中には……。

鐘の音＝息子の成人の祝に黄金造りの太刀をこしらえようと思い立った主人、太郎冠者に鎌倉へ行き、黄金の値を聞いて来る様云付けました。鎌倉へ出かけた冠者は寺巡り、寺毎の鐘の音を聞いてまわります……。

鳴子遺子＝連れ立って鞍馬へ参る途中の二人、道すがらの田で群鳥を追う鳴子を見て、あれは鳴子だ、いや遣子だと口論になり、小刀を賭けることにしました。判定をみどろが池の茶屋に頼みますが、この茶屋が曲者……。

狂言巻空

野村広二

十月下旬山茶花の蕾が開く。十一月の狂言では、金沢で大きな鑑賞能が開かれる。地元和泉流に東京から野村万蔵親子が参加。万蔵氏は「木六駄」をつとめるが、東京でも同曲（喜太郎）が和田喜太郎の会にでる。また京都では黒川能の公演（金剛能楽堂）がおこなわれる。黒川能は伊勢でも式年遷宮記念行事として奉納される。名古屋ではやるまい会。

十月十日和泉会（十三回）。よく晴れた日で、この日私事ながら親戚（花嫁）の結婚式でO会館にでかける。礼服をつけて身が引きしまる。でかける時間が丁度テレビの「清経」（桜間道雄）に当ったので紹介だけみて車にのる。会館につくと、まだ時間もあることとて、周囲了解を得て一階ロビーのテレビをNHKにする。清経が笛を吹く場面がでた。古風でしかも風情十分モーニング姿で能をみる様子はまことに晴れがましい。終りまでみた頃可愛い花嫁姿が到着した。宴の半ばに祝言謡を一くさりおくる。旅行に出で立つ若い二人をおくってから能楽殿に駈けつける。もう「川上」がはじまっていた。目をあけてもらった夫が女房と別れる、いや別れないと言い合うあたりの明暗に富むむつかしい心の動きが微妙なニュアンスで伝わってくる。婦唱夫随でまた目がみえなくなった夫の手を女房がひいてわが家にかえる切りの光景も心暖まるよさをみせた。人情の極地であろう。藤九郎氏と先月の万蔵氏が演じたこの曲と比較して甲乙はつけ難い。万蔵は技を抜けて狂言の心に徹し、藤九郎は技に徹して狂言の風格を持するといえようか。ちがった味わいに、二度接したことをよろこぼう。

「牛盗人」の子役・今枝郁雄君と「千鳥」の太郎冠者・礼之助氏の活躍振りを期待してみられなかったが、幸いにも見所の期待にこたえてくれた由。うれしい。おわって藤九郎氏にしばらく時間をいただいて話をうけたまわる。能楽協会設立のこと、狂言方の昨今のいそがしさ、川上のこと、今度でる「狂言総覧」（能楽書林）のことなど。しみじみとした話だった。十八日夜能・麦の会で「不見不聞」（又・松・礼）をみてのかえりみち、東の空をみればうす橙色の火星が黒くなった森のぼるか上に光っていた。この狂言みがいあり。なお十六日、日本伝統工芸展（オリエンタル中村）で狂言風の乙御前（京都・林駒夫）をみつける。下旬は、丸善の豪華本・新装本などの展示会に行く。能楽関係は日本の伝統芸能（国立劇場監修、第一法規出版）、能と狂言の解説・丸岡大二）能絵鑑（中村保雄ほか、フジアート出版社）など数冊。能絵鑑は発行早々の文字通りの豪華さ。印刷の色も実にあざやか。高砂は前シ

テ同ツレ、熊野は別に二字、厚かましくも大きな本をひらいて、解説を読みながら、その一枚一枚を手にとり、ゆっくりみせてもらった。「聞きかじり見かじり読みかじり」（坂東三津五郎三月書房、世阿弥とプランメーカーの会ほか）を買う。

放送は「文化展望・舞台の仮面」、（三隅治雄・喜多長世ほか、NHK）をみる。本は前記のほかに「芝居の速さ遅さ」（喜多実・演能手記、尾崎宏次、東京、一〇・八）「神宮式年遷宮の史的意義」（翁猿楽、林屋辰三郎、朝日、一〇・六）「私の伊勢神宮」（謡曲・三輪、白洲正子、芸術新聞十一月）など。

歳末助け合い

義捐金募集能（第五回）

昭和四十八年十二月三日（日）午前十一時始

於　熱田神宮能楽殿

電話（〇二九一）二

能組

能　安宅　宮々康治

能　羽衣　加藤長久

能　松虫　観世芳雄

能　阿漕　林秋郎

狂言　松風　加藤徳兵衛

狂言　山姥　坂本勇雄

能　巻絹　佐藤勇雄

能　橋弁慶　佐藤文雄

狂言　柴袍落　野村又三郎

狂言　湯谷　長田徹

狂言　安達原　西村秋也

能楽協会名古屋支部　後援　名古屋市

主催　能楽協会名古屋支部

後援　名古屋能楽会

後援　愛知県

随想

在所の者

小供狂言と稽古のこと

小学生斗りで一番の狂言をする。昔は随分ありました。「志びり」「口真似」「柑子」「舟ふね」可愛らしい子供が装束をつけて一生懸命習った通りかたくなって演ずる狂言の上品な面白さは、きまじめに教えられた通りに動く堅さに裏打ちされて、仲々よいものです。

堅張しすぎてオシッコをもらした話だとかガクットつまって、後見につけてもらってもどうしても出て来ないセリフに泣き出した話だとか、昔はそんな話を、チョイ〳〵聞かされたものです。

今は皆頭がよくなった――教え方も変って来たので、めったにそんな事はなくなりましたが昔は、初めての稽古は語り物で口写し、メリハリを覚えるのが第一でした「鶴の語り」「亀の語り」「松の語り」と段々に語りが出来て来ると「志びり」「あかざり」と一番宛、口写しでおけいこが進みます。充分せりふが頭に入った上で立稽古となります。充分覚えているつもりの言葉が立つと云えなくなる。つまる。相手に対する受け答へが満足に出ない。ドギマギすると型がオタラクになって叱られる。こんな事をくり返している内にドウにか受け答えも型も固まって来て舞台に立つ。でも見所が充分認識出来るまでは仲々大変、相手の動き、相手のせりふに合せて自分の役か充分こなせる迄は、修業の連続で、その間には、嫌で〳〵何故こんな事を覚えなきやならんのかと自分で投げ出したいと思う時が出て来る。それを出さぬように教えられた、先生方の堪忍強きには今更頭が下がる気持で、今しみじみ感謝している。

十二月、一月の予告

十二月二日　義捐金募集能

十二月九日　宝生会定式能

能　草紙洗　内藤泰二　高安滋郎

間　佐藤卯三郎

能　鞍馬天狗　野村蘭作　西村欽也

間　井上礼之助　佐藤秀雄

狂言　箕被　井上松次郎　佐藤友彦

十二月十四日　学生鑑賞能

能　舟弁慶　金春欽三　高安滋郎

間　井上松次郎

狂言　清水　井上礼之助　佐藤卯三郎

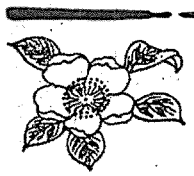
四十九年一月六日　邦謡会

一月七日　学生能と狂言の会

一月十五日　清韻会

一月廿日　宝庄定式能

一月廿七日　三人の会



何と云っても
ますはん
井半はお茶は
◆大名古屋ビル地下街店◆栄（さかえ）地下街店◆サカエチカ店◆松坂屋味とのれんの名店街